第9回 銀華文学賞発表

銀華文学賞はおかげさまで九回を迎えることができました。今回もまた日本全国およびアメリカ、インド、フランスなど海外からの応募を含め、四八二篇の作品が寄せられました。心から御礼申し上げます。

多数の応募作の中から、選考委員／大高雅博・八覚正大・小沢美智恵・小浜清志・都築隆広・五十嵐勉による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。今回も、一昨年新設した歴史小説賞を継続させていただきました。

また御遺族の御厚意により河林満賞も併せて選出させていただきました。

誌面の都合により、奨励賞などの作品は五〇号以降に順次掲載させていただく予定です。

第九回銀華文学賞授賞式・祝賀会および懇親会は、二〇一三年一月二十六日（土曜日）午後二時より東京の大田区民プラザにて「文芸思潮」エッセイ賞／現代詩賞／イラスト・漫画賞といっしょに行なう予定です。どなたでも御参加可能ですので、どうぞお誘いの上御来場ください。

第一〇回銀華文学賞も本年とほぼ同じ要領で行ないます。皆様の御応募を心からお待ちしております。

※予選選考に当たり、小林広一氏、中野睦夫氏、東谷貞夫氏に御協力をいただきました。

銀華文学賞

当選

該当作なし

河林満賞

「白鳥ダンスクラブ」　冴場　渉（千葉県旭市）

歴史小説賞優秀賞

「弧月」　飛葉哲朗（広島県広島市）

「榎本武揚と手袋」　吉田満春（千葉県山武市）

優秀賞

「父の理想郷」　来の宮あんず（東京都江東区）

「夏の揺曳」　室町　眞（東京都杉並区）

「赤い眼」　神通明美（富山県富山市）

奨励賞

「痣―かぎりなく深く透明な赤・俊子―」　土岐田　耕（大阪府豊中市）

「封印」　井上理博（神奈川県横浜市）

「成るがままに」　星野　透（埼玉県所沢市）

「悪意」　成瀬健太郎（神奈川県藤沢市）

「蝶舞う村へ」　遠藤秀紀（神奈川県川崎市）

「藤の家」　馬込太郎（静岡県浜松市）

「太鼓供養」　河野つとむ（神奈川県横浜市）

「通達アルファ」　北澤佑紀（香川県高松市）

「汚れたうさぎ」　山上弓人（岡山県岡山市）

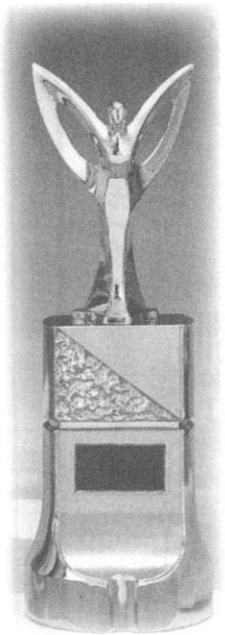
歴史小説奨励賞

「越南の仲麻呂」　佐々木忠弘（千葉県印西市）

「サムライ養鶏」　藤澤茂弘（愛知県名古屋市）

「惣一郎戊辰戦争従軍記」　大森耀平（栃木県足利市）

「国境」　白井　康（愛知県名古屋市）



河林満賞記念トロフィー

パワー不足、マンネリ化か

五十嵐　勉

第九回銀華文学賞は、応募総数が四八二篇で、昨年より七〇篇ほど増加した。これに比例するように二次、三次通過者は増えて、そのあたりのレベルはかなり上がったが、トップクラスが低迷した。文学賞の場合、応募総数が増えればトップレベルも高くなるかというと、まったくこれが当てはまらない。これは「群像」や「文學界」など他の文芸誌を見てもそうである。

いい作品や惚れ込んだ作品には、他の選考委員が反対しても何が何でも推すというパワーが内蔵されているものだが、今回はそういう作品にはお目にかからなかった。選考でも委員どうしの意見が剣戟のごとくぶつかり合う激しい衝突もなく、波風立たずになんとなく収まったような、つまらない選考会だった。

これは、たまたま傑出した作品が出なかったということなのか、それともこの銀華文学賞がマンネリ化してきて、賞そのものから生み出す力が鈍化してきているのか、懸念を抱かずにはいられなかった。ちなみに第三回も当選作は出ていない。そのときは応募総数は一五〇篇で優秀作が五篇出ていた。その次の第四回は逆に当選作が三篇出ている。楽観的に見れば次回は三篇並ぶほどの豊作になる可能性もあるということだろうが、しかしもし後者が原因だとしたら、抜本的なことを考えなければならないだろう。一つの節目を迎えているようにも思う。

冴場渉氏の「白鳥ダンスクラブ」はやはり技量は安定していて確かで、癌という病の肉体を通して見る、未払い者調査の人生の苦渋の模様が、老人たちのダンスクラブの灯火によってひとときの救いと癒しを得る姿は、地味だが体の芯に染み降りてくるような味わい深いものがある。ただ、昨年当選作になっているので、連続の受賞に抵抗があったことは否めない。その意味でも、また深い趣きを尊重する河林賞の性格からしても、この賞にふさわしい作品と言えるだろう。氏の技量はだんだん冴えが出てきて、モチーフやテーマが的を射るようになってきている。その点でも賞揚に値する。

優秀賞の三人はすでに何度も選考に登場して受賞もしている「馴染み」なので、その点でも新鮮さに欠け、作品自身も過去のもの以上に飛躍が見られるかというと、わずかに視点や材料が変わったという程度のものである。私個人

佳作

「ラッキー・シルバー」　服部幸雄
「ジャパニーズ・ドリーム」　李耶シャンカール
「交歓」　相川柊子
「長距離運行」　野上　卓
「ヤギ仙人」　伊藤多津江
「さまよう手」　瀬口　至
「生と死の境にある村」　カレン
「雨の糸」　有森信二
「観音さまに・・・」　山崎文男
「さらされた場所」　瞳山　秋
「旅立ち」　黒田直隆
「山谷ドヤ街残酷屋」　小笠原　新
「ことば」　丸山　史
「小百合と権蔵」　風前舎一気
「リリス」　吉見　淳
「乳」　宮尾美明
「泥の街」　ならはたかし
「ガラスの壺」　波佐間義之
「世間さま」　タナカトモユキ
「不老虫」　大島龍彦
「沈園」　吉田宏子
「流される猿」　皆笹麻希江
「贈り物」　奥はじめ
「まぼろし」　岡野弘樹
「朗読」　荒井隆志
「天まで届け」　白石明子
「瞑想海峡」　齊藤澄子
「ユ　ヒョジン」　武藤蓑子
「都会の夕景」　小林理樹
「念書」　中川一之
「蒼顔の自画像」　秋山よしひさ
「鏡の中の私」　吉田芽生
「泣ける」　小野友貴枝

歴史小説賞佳作

「雪の孔雀」　北条かおる
「人魚師赤目の米三」　碧居泰守
「清明」　ヒミ子

としては不満ではあったが、実績に対して積み重ねの功を認めた結果になった。

そうは言っても、最終選考までの得点はかなりのものだったので、その美点も挙げておきたい。

「夏の揺曳」（室町眞）は屈折した幼年期のこもった翳りが一つの色彩を得ている。ただ、その翳りが余計者として主人公の家に居候している伯母の暴露「どうだ、わかったか、おまえら兄弟はみんな愛人の子なんだ」というところで、露骨に出てしまうのは、味消しで、こういうことは隠したまま含みで生きていくところに深まりが出てくる。母親が妻か愛人かなどということは居直ってしまえばどうということはなく、「だからなんだ」と胸を張って学業や仕事に打ち込んでいけば年とともに消えてしまう。問題はその子が背負う屈折で、その翳りが性格や中枢を作り、独特の何かを作っていくので、そちらのほうを描くべきだった。価値の比重の掛け方が見当違いをしている分弱くなった。

「赤い眼」（神通明美）は、それまで幸せそうに見えていた友人夫婦の亀裂を知らされ、離婚という岐路に立った六十歳の女性の立場を、赤裸々な自然の姿の中に感じさせられる内容だが、鹿の眼は、愛情の基盤を失った女性の根底が透視されるような鋭さがあって、鮮烈である。そのシーンはこわさがあっていいものの、もう一つその底が示されていない。掘り下げがないことが、着眼やシーンの簡単な描写に終ってしまっている恨みが残る。「赤い眼」が自然の中から呼びかけるその声と意味とをもっと深く洞察して、こちらの現実の側に一つの連結としてしっかり提示しないと、たんに着想だけに終ってしまう。その掘削の浅さが、ややもの足りなかった。

「父の理想郷」（来の宮あんず）は、モノローグによる吐露を文体として成立させている小説である。第五回優秀賞の「旅の人」でやはり濃密なモノローグによって追い払われていく一人の老婆の生を描いた作品に対する、老爺バージョンといった趣だが、執拗に独り語りで塗り重ねていく文章が、何かを追い求めて止まない人間のある執着のようなものと重なり合ってくるところが、一つの世界を浮かび上がらせてくる。執念や執着によって生きる、ある受け継ぎがそこに期せずに生起する点は美点であろう。しかし父の理想郷が「自分を待っていた」と邂逅の意味で終らせる結末は惜しく、自分の老境への始まりを含めた普遍的な生の終焉とその意味への深まりまで運んでいない点が不足感を抱かせた。この文体は珍重すべきだが、もっと俗なものなかにうねり沈潜していくことによって逆に何かが現れてくる逆説的な構造を備えている点を自覚すべきだろう。執着や執念を徹底的に表すことによって浄化されてくる方向を見失わなければ、さらにおもしろい作品が書けそうではある。

今回歴史小説の領域は、偶然に幕末から明治にかけてのものが揃い、一つの繋がりを示して希有な作品群となった。

飛葉哲朗氏の「弧月」は、幕末の大塩平八郎の時代を背景に秘剣の成就を見届ける表のストーリーを追いながら、陰謀や黒幕のひろがりを想わせる雰囲気がいい。奥義を描く截然とした文章は切れ味を見せている。これがもっと歴史と直結していく匂いを感じさせれば一段と重みを得ただろう。せっかく大塩平八郎の乱を出しながら、結末が薄い象徴としてしか時代に響いていかないのが惜しまれる。ただ、全体に匂う緊迫感は今回の歴史小説中随一で、文章に結晶感が漲っていた。

吉田満春氏の「榎本武揚と手袋」は、箱館戦争を手袋というおもしろい視点から描いていて、北方の戦争の一側面が如実にわかり、またその合理性のゆえに榎本が敵側でありながら明治政府に重用された経緯も伝わってくる。好短編である。日本の手袋の始まりという歴史側面も含んでいて、読みやすさ、娯楽性にも富んでいる。歴史をこういう身近な面から掘り起こす手腕は一つの才能で、これからも大事にしてほしい。

幕末を舞台にした歴史小説はこのあとも「国境」（白井康）、「惣一郎戊辰戦争従軍記」（大森耀平）、「サムライ養鶏」（藤澤茂弘）と奨励賞の一群が続き、さらに三次予選作品のなかにもいくつかあったように記憶している。これらを並べてみるだけで、幕末から明治への流れがリアリティをもってよみがえる。ちかいうちに特集してみたい。「国境」は北方領土の問題を幕末の取り決めがどのようにされたか鮮明に描いて現代に響いてきているし、「惣一郎戊辰戦争従軍記」は、奥羽地方の戊辰戦争を絵巻物のように表して

河林満賞の創設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品は銀華文学賞に応募される小説作品を対象にし、銀華文学賞選考委員によって銀華文学賞選考会において同時に選考され、御遺族の承認によって決定されます。

受賞者には賞状、賞品、記念品、賞金五万円が銀華文学賞授賞式で授与されます。

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」
文芸思潮

いて、その経緯を納得させられる。「サムライ養鶏」は明治の改革によって食えなくなった武士がどのように日本の養鶏業に力を注いで、立ち上げていったか、人間の動きとしてよく理解できる。学びながら楽しませてもらった。

奨励賞のなかで書き記したい作品も少なくない。

「痣」（土岐田耕）は、若い頃の恋愛を回想した一篇だが、七九歳でこれだけの濃密な男女関係を描けるのは貴重で、やや一方的な男性本意の書きぶりではあるものの、波打つ官能の炎は生々しく伝わってくる。きわどい領域に迫りつつ一線で踏みとどまって、文学の姿として立ち上がらせている。サブタイトルにいろいろ付けすぎて、損をする結果になったが、その心意気を買う。ぜひ七色の虹を完成させてほしい。

「成るがままに」（星野透）は、若い後妻と息子の不倫を素材にしており、星野氏にしては思い切った題材で、その緊張感はこれまでの作品以上に強く引き込ませるが、この大きな材料では、五〇枚はやや無理かもしれない。子供を妊娠している自分に気づくが、どちらの子供かわからない。息子の種とわかるが、その息子は事故死する。あとから息子が自殺したと知り、育てていこうと決意するところで終るが、最後が安易に流れて上ずってしまったのは、長さが足りないことによる。星野氏の濃密で彫りの深い文体は応募作品中でも一、二の酩酊感を伴い、この文章を愛するが、父親の姿がもう一つ見えないことに加えての最後の処理が薄くなった。長くなってもいいので、手を加えてもらいたい。

「封印」（井上理博）は問題作である。死刑執行人の業務を描いて生々しい。執行場面のリアリティはかなり濃く、臨場感は十分である。しかし主人公がこの業務に悩む部分やこの苦悩から辞職するに至ってはどこからか借りて来たような脆弱な思考パターンが突き出して来て、破綻が感じられる。現場に携わる多くの人はこの苦悩を抱えて仕事を続けているはずで、これを簡単に否定してしまうような論理は、門外漢の押しつけのような気もする。題材に凄みがあるだけに、もっと内部に踏み込んだ視点で押し切ってほしかった。

「悪意」（成瀬健太郎）もこれまでにない素材で問題を孕んでいる。外国社会の外国人スタッフのなかで上に立つ者として働く危うさを描いたもので、言葉や社会習慣の食い違いが壁になって、その陰で眼に見えない集合意志が働く怖さをよく描き出している。ただ、動機が恋愛だからこの程度の被害と恐怖で済むが、もっと大きい事件や問題にひろがる可能性を持っている。この構造を拡大していけば、ベトナム戦争時代のベトナムの地で戦う米兵の立場にも当てはまる。この心理構造をよく自覚した上で、恋愛とは別な適切な素材を当てはめていけば、もっとインパクトの強い普遍的な作品になっていくだろう。なぜなら、現在アメリカでも、ヨーロッパでも、アジアでも、同じ問題を抱えて働いている日本人がたくさんいるからである。

「蝶舞う村へ」（遠藤秀紀）はこれも外国を舞台とする作品だが、東南アジアの内陸国ラオスについて書かれた部分は借り物ではなく、蝶についての探求やのめり込みも陶酔的な美しさを伴って一つの世界を立ち上げている。問題は留守中の家族の破綻が安直に作られてしまっていて、せっかくの蝶へのロマンを壊してしまっている点である。サラ金の取り立て以後はやり過ぎで、娘が宗教に走ってラオスで再会することになっては、作為が過多で興醒めになってしまう。蝶をとるか家族をとるかという選択をもっと前の段階で追い詰めていくことによって、蝶への止揚も可能なはずで、後半を根本的に作り直すべきである。「太鼓供養」（河野つとむ）は、太鼓持ちという座敷職業の現代における廃れとその悲哀を巧妙な文体で書き切っていて、一花咲いている。多かれ少なかれ座敷芸はこのような衰勢を辿るのであろうが、それを切り捨てるのではなく、暖かく汲み取ろうとする肌触りが諧謔的なリズムと相まって一つの文体となって流れている。

歴史小説奨励賞で、もう一つ触れておきたいのは「越南の仲麻呂」（佐々木忠弘）である。仲麻呂が越南（ベトナム）の安南都護符の朝衡として赴任し、当時のカンボジア・チャンパの侵略を退けてさらに出世していく過程を描いて、興味深かった。唐時代のインドシナの情勢もよくわかったし、玄宗皇帝期の混乱の状況も間近で見る臨場感がある。唐の歴史にこのように日本人が関わったことをあらためて知らせた功績は大きい。チャンパの時代の象を用いた戦闘もよく書けていて、映画にもなりそうなスペクタクル性があった。記憶に残る作品だった。

佳作になってしまったが、「鏡の中の私」（吉田芽生）の、過去の恋人との幻想の恋愛に染まる大胆な発想は斬新で、注目した。前半のままで押し切ってしまえば優秀賞レベルだったが、最後が平凡な着地をしてしまったのが惜しまれる。着想はおもしろいものを持っているので、人に読んでもらってフィクションの技術を備えていけば一つの世界を持ち得る才能だと思う。

総じて、渾身の力を込めて書いたような作品が乏しい。人の胸を射抜く大きなエネルギーや、磨きに磨いたような結晶感が薄くなってきている。銀華賞の銀のきらめきは、もっと鋭く、強く、深いものであるはずだ。人生の終盤に一生や命を振り返る行為のなかには、もっと強烈な人生の秘密に迫る発見や考えが潜んでいそうである。もっと凶暴で、もっと重大でいい。人生の意味や価値を覆すような新たな試みをフィクションという手段を使って大胆に展開してほしい。来期は銀華文学賞も一〇年になる。思い切った作品が登場してくることを期待している。

受賞作のたたずまい

小沢美智恵

今回は当選作なしという結果になった。

候補作四七編を選考委員全員で読んだのだが、残念ながら受賞作にふさわしい作品がないということで意見が一致した。みなある水準には達しているし、魅力的なところも随所にあるのだが、「この作品！」と推せるだけのたたずまいがなかった。優秀賞、奨励賞、佳作の区別はつけたが、それも僅差である。

優秀賞の神通明美「赤い眼」は、離婚はせずに熟年別居している女友だちの話である。語り手の瑞枝は妹の入院手術の付き添いのため友人・博子の住むマンションに泊めてもらうことになり、その生活ぶりや夫婦関係を知ることになる。タイトルの「赤い眼」は、友人が夜の山奥で見た鹿の眼のことで、彼女が「周りの闇が不本意に生きてきたこれまでの暮らしに思え、赤い眼がこれから進む方向の道しるべに見えてきたの。（略）それで心が決まったの」と語るように、別居に踏み切る切っ掛けになったシンボルである。博子はそれを瑞枝に見せたいと夜の山道に車を走らせ、ついに二人はその「魂まで吸われそうな奥深い光」を見る。だが、翌朝帰途につく瑞枝は、「博子は今夜もあの山道を走っていくのだろうか。（略）憑かれたように赤い眼を探すのだろうか。その眼から更に前に進む力を得ようとして」と友人の心境に思いを馳せるだけで、自分自身は少しも変わっていない。登場人物の心理が変化することが、小説内での正確な意味での「時間」であるなら、この小説には時間が流れていないことになる。妹の子宮筋腫の手術や、友人の別居の決心という「事件」に出会うことで、主人公・瑞枝の心理が変化していたら、この小説はもっと強い顔を持って立ちあがってきたのではないか。

同じく優秀賞の来の宮あんず「父の理想郷」は、父に棄てられた娘が、ふとしたことから父が「理想郷」にいるということを知り、探しにゆく話である。作者は、幼いころの父との思い出や父と母の人となりのエピソードを、ほとんど改行のない書き方で積み上げることで、次第に読者を独特な世界に引き込んでいく。が、せっかくの豊かな作品世界は、インターネットで検索した一碧湖近くの「理想郷」という土地を実際に歩く段にさしかかると、途端に退屈になり失速してくる。同じような記述が延々と続くからである。そして、幼いころ父に聞いた言葉から辿り着いた家が幸運にも父が住んでいた家の隣家で、その家の夫婦が親切

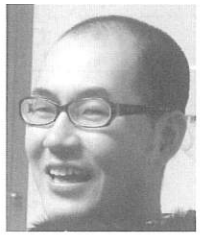
にも見ず知らずの「わたし」に夕食を供してくれ、たまたま壁に貼ってあった父との思い出の鯛の絵から父の最期がわかるという展開にいたると、あまりの都合のよさにリアリティが希薄になる。物語は、この後「結末」に向かうのだが、妻子を捨てて好きな女性と駆け落ちした父が隣家の主人に語った言葉、「妻子のいる家がどれほど心地よい場所であったかも見えずに」をキーワードに、「もし父に理想郷があったとすれば、（略）働き者の妻とその娘の住んでいる城、そこが父の理想郷ではなかったか」という常識的な解釈に回収されるのである。作者は、前もって用意した単一の意味の「解決」に向けて、物語を紡いでいったのではないか。それが作品の自然な流れをさまたげ、「解決」に都合のいいストーリー展開に結びつけてしまった原因であり、テクストが最初に持っていた豊かさを振り落とす結果を導き出したのではないか。

佳作に終わったが、岡野弘樹「まぼろし」は、不思議な臨場感をもった作品である。第二次世界大戦で戦死したと思われていた父が妻と再会する場面。駐留兵士に文句をつけた父が、ぼろきれのように殴られる場面。火事の中で脳溢血を起こし倒れている父を、母子が必死に起そうとする場面。そんな場面がスローモーション画像のように詳細に描かれ、読者の目に焼きつく魅力がある。父は戦場で敵兵を助けようとして助けられず、その際に見た上官の残虐さと相まってトラウマになっている。この作品は、そんな細々としたエピソードを並べて、戦争の無意味さを表現しているともいえる。だが、そこには「今」がない。なぜ二〇一二年の今、戦後すぐの情景しか出てこない作品が書かれなければならなかったのか、その必然性が見えてこない。まるで作者の時間は半世紀前で止まってしまったかのようである。作品にはその時代に要請されている何かがあって、その部分こそが読者を作品世界に引き込み、時代が変わっても簡単には古びたり色褪せたりしないで生き続けるのではないだろうか。この「今」がない作品は多く、それも受賞作のたたずまいに欠ける原因の一つであるように思われた。

その他、紙数が尽きたので詳細は省くが、河野つとむ「太鼓供養」、丸山史「ことば」、飛葉哲朗「黒い淵」、吉田満春「榎本武揚と手袋」、遠藤秀紀「蝶舞う村へ」が完成度の高さで印象に残った。いずれもいい作品なのだが、受賞作に推すにはほんの一滴何かが足りないと感じさせるのである。それが何であるかは、どんな書き手も書きながら模索していかなければならないのかもしれない。けれども、作品世界をとことん突きつめたとき、それは行幸のように降りてくるもののようにも思うのだ。

歴史・時代小説の隆盛と〝おもしろポルノ賞〟設立の必要性

都築隆広



今はどんなことをしていらっしゃるのですか？　と初対面の人に聞かれて、「朝から晩まで、時代小説を読んでいます」と答えていたぐらい、今年は歴史・時代小説が豊作でした。こうした作品の応募が殺到するというのは、年配の人達が佐伯泰英に代表される時代小説ばかり読んでいるということで、文学側の人間としては素直に喜べなかったりもします。それでも、平均技術の高さには舌を巻きました。なかでも歴史小説優秀賞の「弧月」には、かつての歴史小説部門はあり得ないぐらいの選考委員の得票がありました。私も面白く読みましたが、時代小説読者から見たら、わりと一般的な時代小説なのではないかという懸念もあり、そのあたりの判断は読者に委ねるとしましょう。

続いて、歴史小説優秀賞の「榎本武揚と手袋」と佳作の「人魚師赤目の米三」の二作も私は推しました。その着眼点の秀逸さから支持を集めた「手袋」はともかく、人魚のミイラを作るという筋の「人魚師」の方は、「世のオカルトファン垂涎」と絶賛する私とは裏腹に、訝しがる審査員意見が多数を占めました。人魚のミイラはこれほどまでに風あたりが強いものなのかと、その温度差たるや甚だしかったです。

ところで、銀華文学賞全体としましては、ずば抜けた作品があらわれなかったので、今年は当選作なしでした。公募の賞で当選作が出ないときは、主催者側がお金をケチッているか、選考委員の性格が極端に悪いかのどちらかなのですが、今年の銀華文学賞に関しましては、本当に飛びぬけた作品がなかったのだと、我々、審査員一同が保証いたしましょう。

そのかわり、「夏の揺曳」「赤い眼」「父の理想郷」の良作がトリプル優秀賞でした。

まずは少年視点の物語ながら、一家の父親と伯母のダメ人間ぶりが凄まじかった「夏の揺曳」。ラストのどんでん返しにはかなりびっくりしたのですが、他の選考委員の方々はさほど驚かなかったそうです。確かに世間ではよくある話なのですが、そこに辿り着くまでの筋の運び方が巧みでした。次に、「赤い眼」。舞台の石和温泉は、私も毎年、忘年会で行ってバカ騒ぎをしているのでイメージし易かったです。この小説に登場する女はリアリティーのある変な

奴といった感じで、それを普通のことのように淡々と描いてゆく文体に好感が持てます。ラストシーンにも余韻があって、銀華文学賞らしい作品だと思えました。

個人的なイチオシは「父の理想郷」でして、「大黒屋のスガキさん、理想郷にいるそうよ」という不可思議な語り出しが、ハリイ・ケルメマンの「九マイルは遠すぎる」やクリスティーの「なぜ、エヴァンズに頼まなかったのか？」といった、〝謎めいた一言を探ると、とんでもない事件があきらかになる系ミステリー〟を連想させ、マニアにはたまらない作品でした。失踪した父親がどこか遠くで幸福に暮らしているのではないかというビジョンは、辻原登のスパイ小説（実際にスパイが出てくるわけではなく、そういうジャンル）、「ジャスミン」とも共通しますが、「父の理想郷」には独自の物語と説得力があって、魅了されてしまいました。

奨励賞の「太鼓供養」も辻原登の「遊動亭円木」をイメージさせる、奥深い芸の世界でした。小沢選考委員が「時代小説なのかと思った」とこぼしておられましたが、現代劇を大昔のことのように読ませてしまうのも作者の手腕といったところでしょう。

同じく奨励賞、「蝶舞う村へ」は主人公が堂々と会社の金を使い込んで、ラオスへ蝶を見に行くという冒頭が素晴らしい。ただ、後半はドラマチックに描こうとするあまり、フィクションが過剰になっていました。作者は比較解剖学の分野では名の知れた研究者ですが、無理に創作しようとせず、学生にやさしく語りかけるようなタッチで書いて欲しかったです。特に文学というジャンルでは、「自分が体験したこと」や「体験する可能性（リアリズム）があること」の二本柱をどこかしら、意識下に置く必要があります。

最後に問題作「『痣』――かぎりなく深く透明な赤・俊子」。サブタイトルの「かぎりなく透明な」の部分に赤ペンで傍線を引いて、「ブルー」と書き加えたのは私だけではないはず。内容はせつなさのあるポルノで、昨年に続いて、生涯で出会った女を書いてゆくという、井上靖の「あすなろ物語」を連想させる連作です。私もこれまでに振られた女の名前を横並びにしてゆくだけで「源氏物語」五十四帖が書けてしまいそうですが、この小説に関しましては主に濡れ場での主人公とヒロインの台詞があられもないといいますか、あけすけな印象を持ちました。ですが、選考委員の方々を喜ばせたり怒らせたりした話題作でもあり、確かに面白いといえば面白く、文学作品として評価すべきか、スターウォーズみたいにどんどん続いてゆくのかなぁと、とにかく圧倒されました。型に嵌らない作品を型に嵌める、〝おもしろポルノ賞〟の設立を本気で求めたいところです。

難しい選考となった

大高雅博

今回は下読みの段階から、質の高い作品が多く、中々難しい選考となった。

佳作となったが、二つの作品が気になった。

岡野弘樹「まぼろし」は、最近では珍しく選考員の評価が真二つに分かれる作品であった。父親が戦地から帰ってくるのだが、戦争の後遺症で、存在感がなく、また、その行動も突飛で、現実的ではない。論理的に考えると小説が破綻していると考えるか、それもこれも含めて「まぼろし」とみるかで評価が違う。小説の曖昧な部分、例えば、帰ってきた父が、妻と息子にしか見えないと思わせる部分もある。最後まで読むと、そうではないようだが、それも含めて、戦争によって、まぼろしのようになってしまった父というのは、その存在が反戦的である。筋としては、妻と子にしか見えないまぼろしの父がいて、最後に本物の父が帰ってくるが、結局存在感がなく、まぼろしのような存在だったというのが、面白かったかもしれない。

瞳山秋「さらされた場所」は、翻訳小説のような趣がある作品である。かなり上手で、完成されていると思われる。ただ、全く日本人の出ない作品でこの小説を書く意味があるかといわれるとそうとも言える。それに、これは、かなりの資料を使ってあり、それが、この小説にどの程度反映されているのか分からない。もう一作この人の作品を読みたい。そして、このレベルの作品が生まれれば積極的に評価せざるをえないのではないかと考える。

優秀作の室町眞「夏の揺曳」は、何作か読んだことがある彼の作品のなかでは、一番優れているかもしれない。少年期の父との関係を軸にした自伝的な小説なのだが、ただ、この人は独特の切り口の前衛的な作風があり、この作品が評価されるのは室町さんにとっては少し不本意かもしれない。次作は室町さんらしい作品を期待する。

優秀作、神通明美「赤い眼」は、前作までのものとは全く違う印象があり、興味深い。赤い眼は鹿の眼のことであるが、その不気味さは、女友達からくるもので、なぜだか、迫力がある作品に仕上がっている。神通さんには不本意かもしれないが、僕が読んだなかではこれが一番良いかも知れない。

優秀作、来の宮あんず「父の理想郷」も、今までの作品の中では、一番読みやすかった。この人の作品には小説的には必要な歪みのような物が感じられるのだが、今までは

それが強すぎた面がある。今回はそれが少なく、すんなり読めた。

時代物では優秀作吉田満春「榎本武揚と手袋」が面白かった。戦いでの手袋の重要性を縦軸に、榎本武揚と関係させるのは中々の着想だ。ただ、後半部分で、もう少し絞り込んだ方がよかったかも知れない。冗長的になったのは残念。

白井康「国境」は北方領土問題を扱った作品で、興味深く読んだが、枚数が少なすぎるようだ。もう少し、長くした方がいいようだ。

藤澤茂弘「サムライ養鶏」は、結局、名古屋コーチンを生み出すという話でこれも興味深く読んだ。

その他にも、相川柊子「交歓」は夫を飼育していく話で着想が面白い。丸山史「ことば」は昔の女友達との再会であるが、大阪の風景が旨く描かれていると思われる。

さて、今回は、当選作が生まれなかった。

最初にも書いたように全体のレベルが上がっている。前述のように中々の力作が集まっている。そのために逆にその中を突き抜けるようなエネルギーが作品に必要とされている。

恐らく、書くべきものはきっと、目の前にある。頑張って下さい。

ひとり選評

八覚正大

この賞も第九回目を迎えることになった。今回は、なんと、どうしても抜けられない別の世界の「仕事」があり、選考会に出席出来なかった！　結果を聞くと、受賞作なしとのこと……そんなものか、という気持ちでこれを書いている。幾分孤立感は否めないが、結果はある意味で私が推す作品の「ありのまま」を書くことになった。それが良いのか悪いのか、本当は当たっているのか、いや外れているのか……読者にお任せする。任せられても困るかもしれないが。

読んだ順番に印象に残った作品を上げて行こう。

「再会のゆくえ」　お互いに自閉症児をもってしまった、かつての男と女が保育園で再会する。ラストが面白く文学にはなっている。

「長距離運行」　運送業界の話。よく描かれていて小説にもなっているが、やはり事件のような山がほしい。

「通達アルファ」　夫と子どものいる女性社員の不倫の気

持ち、でもそのくらい遊びがなければ、やってられないという感覚は分かる。PCメールの展開がもっと欲しかった。

「畜生と家主貞良」　少年の目から見た、おじさんおばさんの世界。ストーリーというより、べったりと世界を見ていく文体のおもしろさがある。

「サムライ養鶏場」　名古屋コーチンのルーツを描いた、なかなか読める作品。侍の中からそのプライド枠を外せる柔軟者が現れ、時代に適応して行った……。知識のみならず、ある種、勇気の湧く面白い作品である。

「弧月」　臨場感あふれる読ませる作品。プロの文体と言っていい。忍びと侍の対決なのだが、まず剣術の試合の描写の巧みさ！　しかし実は本当に勝負を制する支配力とは、奸智こそであり、そこには男と女の問題もあるだろう……それを匂わせつつ（しかし見事な隠し技？）政治のしたたかさを捻り入れるスタンスも見事。時代物としても、また銀華文学賞としても私は推す。

「悪意」　アメリカに赴任した若い日本男性の日常。といってもその中に立ち現われる非日常感覚。それがなかなかうまく描けている。そして異文化と触れ合いながらその世界と対峙しつつ、どこか心を病んで行く闘いへの痛ましさと踏みとどまりの感覚を感じる。なかなかの秀作である。少なくとも優秀賞には推したい。

「五十年目の乳房」　母と子の長い歴史が見事に描かれている。息子の視点から母親を見続けてきた人生。母親の乳がん、その手術……。実に文が良い。私は銀華文学賞に推したかった。しかし、結果を聞くと、えっ、何にも入っていない？　作者の人生が、長い時間の経過をじっと見続けてきたまなざしが、見事に描かれているではないか！　文学というのは、書き方も自由だし、読まれ方も自由だ。しかし、言葉というものが人間の生み出した最高の発明品であり自らに与えた贈り物とするなら、このような作品こそ「書くに値する命の重み」を感じさせるのだが……。

「ブラキセラピーな奴」　前立腺ガンの手術の話。克明に描いてあり。それだけで評価に値しよう。文学を超えて病理とそれに接した心の描写を読む価値がある。

「まぼろし」　これも凄い作品だ。戦争から生還した父親が、心の奥深い傷をいやせず、苦しみ不可解な行動を起こして行く……それを見続ける主人公。戦争？　少し古いという読者もあるかもしれない。しかしここには、暴力の持つ人間の性・業が描かれている。鮮烈で哀しい作品である。優秀賞には推したい。

「もういいかい」　死に臨んだ男の内面。いろいろよく描けているが……。タイトルは以前にどこかで聞いたような感覚。

「赤い目」　老女二人の対話。今一つかなと思いつつ、ラストで鹿が出てくるあたりから、良くなって読ませた。

選評

「九月の夢」　夫を亡くした女性が、子離れもしなくてはならなくなる。ラストで新しい道が開けて行く所は良い。

「念書」　人間の情と現実が描かれている。男と女も。ただカンボジアというシチュエーションは必要だったか。

「藤の家」　妻を亡くした画家。前半の男と女の臨場感はあるが、後半の流れがどこか唐突。

「蒼顔の自画像」　リストラを食いガードマンをやっている男の話。それはよく描けている。

「痣」　性愛のエロスを、ここまでうまく描かれては臨場感、扇情感を禁じえない。言葉の使い方とその世界を知りつくしている感がある。快感のなんたるかを言葉に込める力……と言えよう。ただ、タイトル副題が、限りなく透明に近いブルーの反対か……なにか、もう少し小説としての志のようなものも見たかった。でも優秀賞には推したい。

「太鼓供養」　太鼓叩きの世界、流暢な流れ……描き方は評価するが、それ以上のインパクトは感じなかった。

「闇」　死者の側から見た葬式の話。よく描けてはいるが、死者が饒舌過ぎた。

河林満賞「白鳥ダンス倶楽部」について。

冴場さんの作品は、探偵業の、しかし人生に疲れた男が自らの回想的な過去を再び垣間見るようなところがあった。しかもどうにもできない状況への、男の「渇き」のような情が見事に出ていたと思う。今回の作品は、さらに主人公の男が病んでいる。転移性のガンの術後、しかし生活のために多重債務者の家へ行くという出だしだ。そこで出会うのは七十歳を過ぎたような疲れた母親だ。それでも別れ際怒りの情をぶつけられる。……帰路、入った喫茶店では不思議な光景を目撃する。やはり七十代の男女が異様に着飾りダンスを始めたのだ。……最後にはそれに巻き込まれ、相手をした女性の「彼氏」から恨まれもする……しかしそんな残り火を燃やすような老人たちの生き方に、自らもどこか生きる元気をもらい直す――という小説である。高齢化社会を目前にした日本の、そしてまた作者自ら身体を病みながらそこに入っていく、その作家としての「まなざし」を感じる秀作と思う。さらに、絞り出すように「男」の末路に光を投げ、書きつづけてほしい作家である。

……やはり、選考会に出て、諤諤喧々……とやらないと、高揚感が湧かない。人間とは個としての性を深くもつとともに、仲間集団としての繋がりの中で、自己を把握できる存在でもある。言葉というのは、個の内面から湧き出る様々な層と共に、むしろ人間の「あ・い・だ」に生まれ、繋ぐ作用をもつものだという事実に、いまさらながら気付かせられる。選評においてそうなのだから、書くことに措いておや。書き手はすべからく、仲間を求め自己を開き、孤立しないことを強くお勧めする。

読まれることの怖さ

小浜清志

小説を読まれることの怖さを識ったのは今から二十数年前、やっと春のきざしが見えだした三月の初めだった。

新宿中央公園に面したマンションの十一階が私の師匠である中上健次の事務所だった。私がその事務所の電話番として通いだしたのはその年の初めからであったが、当然定職もあったし夕方の三時間だけという取り決めだった。

職場近くの四谷三丁目の地下鉄に乗り新宿で下車し西口から中央公園へ向かう地下道を歩いて事務所へ向かう。

マンション入口の郵便受けから郵便物を取りだしてエレベーターへ向かう頃から私は緊張して身がまえる。電話番という名目ではあったが、時折中上健次が顔をだし、私の原稿の進捗状況や作品の構想などを、まったく脈絡なく尋ねることがあった。それが単なる質問であるわけではなく、時には叱責と怒号がとびちる。

その日は鍵が開いていた。中上健次が先に来ているとわかった瞬間から、私の鼓動は変調をきたす。私は届いたばかりの文芸誌や新刊書などをかかえて部屋に入った。中上健次はいつものように絨毯に仰向けになりハイライトを吸っていた。

目を閉じていれば声はかけないが、目を閉じたまま天井を見ている。

「今月の文芸誌が届いていますが?」

私が小さく声をかけると空いている手で床を叩く。その場所へ「文學界」「新潮」「群像」「すばる」「海燕」をつみあげた。煙草を灰皿へ置いたまま、★力ずくし★に封筒を破り雑誌をパラパラとめくっていく。私は煙草が灰皿から落ちないように見張っていた。

事務机に向かっていた私は寝転がっている先生を見下す格好になっていることが気になっていた。床の灰皿から墜ちた煙草をひろい事務机の灰皿で消す。ずっと無言が続いていた。「海燕」を広げたとき、私の友人の名が見えた。

「先生、××は私の友だちです」

「××か?」

「はい」

私の返事を待たずに頁をめくっていたが、数分間目を通したあと、上半身をおこすと灰皿に目をやった。煙草がないのを悟ると新しい煙草を取りだした。私はすかさず忠実な執事のようにライターの火を差し出す。大きく吸いこんだ煙を天井へ吐きだすといつもの野太い声で呟いた。

「こいつ酒呑まんだろう」

「はい、そうです」

とっさに答えはしたものの私は予想もしていなかった言葉にうろたえていた。わずか十数行しか読んでないはずなのに、見も知らぬ友人が酒を口にしないことが何故わかるのか。

驚愕する私を見て先生が笑う。

「お前、そんなことで驚くなよ。こんなの当たり前のことだろう」

「なぜ判ったのですか?」

私は思わず質問してしまったが、すぐに後悔した。しかし、手遅れだった。憮然とした表情に変った先生は無言で立ちあがった。思いつきの質問を先生は最も嫌った。窓際のバッグから紙袋を取りだすと、私の前に叩きつけるように置いた。

「ここに五つの作品がある。明日一杯時間をやるから、これを全部読んでみろ」

私はおそるおそる紙袋の中身を取りだした。それは来月に選考される新人賞の作品だった。

「いいか、最初はまったく何も考えずに読む。その次にこれは名作だと決めつけて読む。そして最後に駄作だと思って読むんだ」

私は思わぬ展開に狼狽していた。先生は財布から一万円を取りだすと紙袋の上に置いた。

「いいか、これは食費だ。この部屋から一歩も出ずに読むんだ。じゃ、明日」

先生は一方的に告げると部屋を出て行った。残された私はしばらく何もできずに煙草をたて続けに吸った。何がどうであれ師匠の言いつけにさからうことはできない。とりあえず職場に電話をして明日は休みますと伝えた。最終選考に残った作品はずっしりと重かった。先生が何を教えようとしているのかが分かってくると感謝の気持がわいてきた。そして読んだ。言われた通り読みつづけた。いつ夜があけたのかも知らなかった。しかし読み進めていると作者の風貌や生活習慣などが浮かんできたことは自分でも驚きだった。そして読むということが少しわかった気がした。

翌日現われた先生は憔悴しきった私を見て満足そうな笑みを見せた。

「お前ならどれを当選作にする?」

「私は当選作なしです」

「そうか、強いてあげるならどれが一番いい?」

私は読みつづけて得た感想を問われるままに答えた。一時間ほどの問答が終りかけたとき先生が突然ほこ先を変えた。

「この作者の中で離婚した者はいるか?」

第９回銀華文学賞

私は一瞬答えにつまったが、おぼろげに浮かんだ作者の名を挙げた。何故そう思う？　離婚の理由は？　質問は矢つぎ早にくり出された。勿論、正解はどこにもないが、推測の深さを追及されていた。結局、そのままゴールデン街へ場所を移し明け方まで議論はつづいた。しかしあの日を境に私の読む姿勢が変ったのは事実である。

さて、長々と回顧談をつづったが、今回の選考に当って再読した作品は「榎本武揚と手袋」「サムライ養鶏」「蝶舞う村へ」であった。

書こうとする作品におぼれたり、または冷淡になりすぎて形を崩してしまった作品が多かったが、作者の作品に向かう姿勢に大いに心惹かれた。

選考会風景

文芸思潮銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞・イラスト・漫画賞

授賞式&祝賀会・新年懇親会

読者の皆様、今年も「文芸思潮」銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞・イラスト漫画賞の授賞式および祝賀会・新年懇親会を次のように開催いたします。

どなたでも参加できる楽しい文学の集いです。創作への熱い思いを交わし合いましょう。どうぞご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

日時●平成二十五年一月二十六日（土）
授賞式午後二時／祝賀会・新年懇親会五時半

会場●東京都大田区民プラザ地下小ホール
東京都大田区下丸子三・一・三
ＴＥＬ０３・３７５０・１６１１
※東急・多摩川線「下丸子」駅前

会費・飲食費●授賞式無料、祝賀会一人五千円

問合せ・予約申込●アジア文化社・文芸思潮
ＴＥＬ〇三・五七〇六・七八四七里見・五十嵐まで
または 090-8171-9771 まで

銀華文学賞選考委員プロフィール

小沢美智恵
おざわ　みちえ

1954 茨城県生まれ
千葉大人文学科卒
93「妹たち」で川又新人賞受賞
95 評伝「嘆きよ、僕をつらぬけ」で蓮如賞優秀作
06「冬の陽に」で千葉文学賞受賞
日本ペンクラブ会員

大高雅博
おおたか　まさひろ

1954 石川県生まれ　日大国文学科卒
80「旅する前に」群像新人長編小説賞受賞
他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥ・リメンバー」など

都築隆広
つづき　たかひろ

1978 山梨県生まれ　東海大文学部卒
2002「看板屋の恋」で第 91 回文學界新人賞受賞
「狼を見る」（「文芸思潮」）「ハンコの町の鰻がいる家」（「三田文学」）他
月刊「望星」書評員

八覚正大
はっかく　まさひろ

1952 東京生まれ
早大理工学部数学科・都立大仏文科卒
教師・精神対話士
92「十二階」で新潮新人賞受賞
小説「零度の遊び」「イエロークラスター」「父のフレーム」「カウンター」ルポ『夜光の時計』

小浜清志
こはま　きよし

1950 沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87 作家中上健次に師事、マネージャーを務める
88「風の河」で文学界新人賞を受賞

五十嵐勉
いがらし　つとむ

1949 山梨県生まれ　早大文芸科卒
79「流謫（るたく）の島」で群像新人長編小説賞受賞
84-90 タイ在住、カンボジア問題を取材「東南アジア通信」「ASIA WAVE」編集長
主著『緑の手紙』（インターネット文芸新人賞）・『鉄の光』他の作品に「ノンチャン、NONGCHAN」「聖丘寺院へ」などがある

作家集団「塊」メンバー

河林満賞受賞作

白鳥ダンス倶楽部

冴場　渉

国道の車線を左に折れて銀色の塗装がわずかに残る錆びついた鉄製のアーチをくぐり、以前セールスの仕事をしていたとき度々通った駅前通りに入った。フロントガラスから見る町はすっかりさびれており、狭い通りに建ち並ぶ店舗の半数近くが空家だった。車をゆっくり走らせながら通りの様子を観察すると、閉ざされた店舗のシャッターに貼られた「貸店舗」の札さえ永い歳月に黄ばみ半ば破れたまま放置され、残った断片が風に吹かれて小刻みに揺れる情景が商店街の荒廃を物哀しげに伝えていた。

五分と走らないうちに遮断機のない踏切に突き当たった。その脇に東京と成田を結ぶ私鉄線の駅があった。特急も急行も停車しない小駅で、瓦葺きの粗末な駅舎は昔と変わらぬ姿で同じ場所に建っていた。小さなロータリーを抜けて線路側が切り通しになった急坂を上った。上りきってT字路を右に折れた辺りが起伏に富んだこの町の一番の高台だった。

角にあるドラッグストアの駐車場に車を停めて外に出た。目的地までかなり距離があったが、住宅が密集するこの町で安心して車を置いておける場所は他になかった。手元の時計は午後三時を表示しており、十一月半ばの薄曇りの空は早くも夕暮れの気配を見せはじめていた。

一〇〇キロ余の道程を幾つもの仕事を片づけながら移動

してきたから、病み上がりの弱った体はそろそろ悲鳴をあげていた。一日の最後の仕事だったが、目的の場所まで歩き通せるかどうか自信はなかった。正直なところ仕事をする意欲もほとんど失せていた。しかし、納期が迫っている案件で早急に報告書を纏める必要があった。何とか気力でやり遂げようと覚悟を決めて歩き出した。

六月の末に体調不良で緊急入院し、転移性のガンと診断された。まる一月絶食療法と称する点滴治療を受けた後、八月に入るとすぐ大腸と肝臓にあった腫瘍を切除した。退院後は傷口も塞がらないうちに抗ガン剤を用いた治療をはじめ、今も週一度病院に通う生活をしている。当初、医者の診立ては悲観的で完治は困難と宣告されたが、術後の経過は予想したよりも順調だった。

とはいえ、矢継ぎ早の荒療治で心身ともに最悪の状態が続いた。退院後は二階にある自室への上り下りでさえ息切れし、歩行中しばしば奇妙な発作に襲われて立ち往生するという情けない日々を送っていた。そんな状態でも運転席に座るとなぜか混濁した頭脳が覚醒し、どうやら車を走らせることができた。治療費の出費は大きくいつまでも休んでいるわけにはいかなかった。まだ不安はあったが十月に入ると早々に元の仕事に復帰した。

崖下に広がる住宅団地の家並みを見下ろしながらしばらく歩くと勾配の強い下り坂に差し掛かった。一月に及ぶ絶食のせいか筋肉がすっかり衰えており、下り坂は足に大きな負担を強いた。一〇〇メートルも歩かないうちに膝がひどく痛み呼吸が苦しくなってきた。それでも無理をして歩いているといきなり目の前が真っ白になった。そして、何一つ映らない視界のなかに幾つもの小さな金色の輝点が浮かび、それがぱちぱちと明滅して弾け飛んだ。おそらく抗ガン剤の副作用が脳にきているのだろう。「天使が降りてきた」と自分流に名づけたお馴染みの発作で、以前の経験では回復に時間のかかる危険な症状だった。半ば手探りでガードレールに両手をつき、その場に蹲って発作が鎮まるのを待った。

乱れた呼吸を整え目を閉じてしばらく動かないでいると、

「どうされました」

誰かが声を掛け遠慮がちに肩に手を置いた。目を開けて声の主を見上げた。発作は治まりかけており相手の姿は普通に見えた。

七十代前半といった年格好だろうか、黒いコートを着た小柄な女性がこちらを不安げに見下ろしていた。紙製の大きなエコバッグを持っていたから買い物帰りだろう。

「大丈夫ですか。救急車呼びましょうか」

「いえ、お構いなく。もう少しで治まりますから」

「でも……本当に大丈夫ですか」

「大丈夫です。放っておいて下さい」

言ってはならない言葉だった。親切心で声を掛けてくれた年長者に対して無礼な言葉使いだと、口に出してから気づいた。おそらく私は二十歳以上も年上の女性に同情された自分の不甲斐なさに腹を立てていたのだろう。相手の優しい気遣いも考えずに強い拒絶の言葉を口に出してしまった。

こちらの態度に驚いたのか、女性はそれ以上何も言わずに逃げるように立ち去った。彼女の表情にはどこか恐怖の色があり、余計な世話を焼いてひどい目に遭ったという気持ちがはっきりと顔に出ていた。すでに発作は治まっていたが、蹲った姿勢のまま女性が遠ざかるのを待った。そうしていると自分を責める気持ちがさらに強まり惨めになった。

とにかく仕事を終わらせるしかなかったから、再び気力を奮い起こして歩き出した。発作を恐れてこれ以上はないほどゆっくりと歩を進めた。わずか二〇〇メートルほどの距離を長い時間を掛けて歩いていると、前方に道幅の広い通りが見えてきた。下準備をしたときの記憶では確かその辺りだった。

ファイルから地図を取り出して確認した。訪問先は坂道と県道が交差する位置にあるはずだった。しかし、その場所は木立に被われて家屋らしきものは見当たらなかった。坂道の下は崖地になっており、境界に設けられた鉄柵の手前に密集した生け垣が連なっていた。歩いていくと野放図に伸びた山茶花の茂みに五〇センチほどの隙間があり、その先に崖下に下りる急な石段が認められた。のぞき込むと樹間に屋根の一部が見えた。地図では高低差がよく分からなかったが、どうやらそこが目的地のようだ。

石段は下り坂以上に難物だった。なぜか片側だけに設置された鉄製の手摺りにしがみついて一段ずつ慎重に下りた。崖下に雑木林に囲まれた三〇坪ほどの空き地があり、狭いスペースに小さな平家が一軒建っていた。六畳二間に台所と風呂場、おそらくそれくらいの間取りの家だろう。築年数はおよそ四〇年か。風雨に曝され続けたセメント瓦はすっかり元の色彩が剥げ落ち、板張りの外壁も腐朽して所々に破損を修理した跡があった。建物を見る限り報告書の生活ランクには、躊躇なく「劣悪」にチェックを入れるレベルの荒れ果てた家だった。

もう十年以上も奇妙な仕事をしていた。元請の情報サービス会社から指示を受け、主にローンの延滞者や破綻者の家庭を訪問して「調査」と称する業務を行うのだ。銀行や信販会社が依頼主だったが、なぜか私の仕事には名前がなかった。元請との関係では「調査スタッフ」と呼ばれている。しかし、その言葉は業務の具体的な内容を何一つ伝えていない。依頼主である金融機関の名称を告げて債務者と面談する以上、表向き「調査」と称しても相手は債務の督促と受けとめる。そこに巧妙なからくりがあった。

「貸金業法」という難しい法律があって第三者が督促業務を行うことを禁じていたから、あえて「調査」と称して相手の事情を聞き出し併せて心理的な圧力を加えるのだ。つまり、「調査」は法の規制をすり抜けるための欺瞞の言葉だった。もちろん業務はそれだけで終わるわけではない。「調査」で判明した情報は債権者が次の段階で行う本格的な「回収業務」の資料として活用され、あるいは裁判所に提出する申立書類の不可欠な添付資料として用いられる。

職業上の習性でまず軒下の電気メーターが作動していることを確認した。次に玄関に回って半ば腐食した鉄製の郵便ポストを検めた。氏名の表示はなくポストの内部に郵便物は見当たらなかった。玄関は磨り硝子の嵌ったアルミ製の格子戸だった。その引き戸だけが老朽化の進む家屋に比べて新しく、いかにも不釣り合いな印象を受けた。理由は容易に推測がついた。たちの悪い金融業者が何度もこの家を訪れているに違いない。連中には交渉が不首尾に終わると腹立ち紛れに玄関を壊していく習性があった。玄関のドアや引き戸だけが不自然に新しい訪問先は、大抵悪質な業者が行う非合法な「回収業務」の洗礼を受けている。ここもそういう手合いのターゲットになるような家庭なのだろう。

軒下を見上げるとやはり風雨に汚れて真っ黒になった表札が掲げられていた。文字はすっかり褪色していたが「西塔伸二」という姓はかろうじて読み取れた。指示書には「西塔伸二」と訪問相手の氏名が記されていた。確かにこの家が会社から指定された調査地に間違いなかった。手順に従って写真を撮った。家全体が見通せる遠景写真を二枚、それにポストと表札のクローズアップだ。

外観調査を終えて額の汗を拭い乱れた服装を整えた。さらに対象の家屋をもう一度仔細に観察した。地形から見て以前は丘陵地の谷間に周囲から全く孤立して建てられていた住居だ。地価の安いそんな場所しか入手できない貧しい家庭だったのだろう。あるいは所有者が住まなくなった古家を借りているのかも知れない。日射しが届かず水はけも悪い場所に建てられているから、もともと安普請の建物はすっかり痛んで全体に腐朽が進んでいる。「資産価値なし」と調査用のメモに記入した。ざっと見たところどの部屋にも灯りが点いている様子はなく家内は静まりかえっていた。こんな所まで来て留守だったらそれこそ最悪だと内心不安な気持ちになった。

玄関先に立って呼び鈴を押した。ローン事故を抱える訪

問先で、呼び鈴がまともに機能する家庭はまずなかった。この家も他のケースと同様だった。

「こんにちは」

とりあえず呼びかけてみた。しばらく待ったが応答はなかった。

「こんにちは」

今度は少し大きな声で呼びかけた。やはり家のなかはひっそりとしていた。滅入る気分を抱えながら待ち続けた。

声を掛けるのは二度までと自分のルールで決めていた。しつこく呼びかけて相手に恐怖心を与えると、在宅者がいてもまず出てこないからだ。さらに一分待った。あきらめて帰りかけたとき玄関に灯りが点いた。

「こんにちは、西塔さんのお宅ですか」

少し元気が出た。三度目は相手の姓を入れて丁寧に呼びかけた。引き戸の向こうから「はい」と女性の小さな声が応答した。

ロックを解除するときの金属が擦れ合う音が聞こえ、ブロンズ色に処理された格子戸が戸車を軋ませながらゆっくりと開いた。素足に木製の粗末なサンダルを履いた女性が不安げな面持ちで顔を出した。

「西塔伸二さんのお宅でしょうか」

訪問先をフルネームで再確認した。それが面談時の約束事だった。

「どんなご用ですか」

こちらの問いには答えず女性が問い返した。その声は弱々しくわずかに震えていた。相手は午後の思いがけない訪問者を警戒し怖れていた。その手の反応には慣れていたから次の言葉を口に出した。

「西塔伸二さんにお聞きしたいことがありまして、それでお邪魔しました。伸二さんはご在宅でしょうか」

「あの……」と口ごもって女性はいよいよ不安げな表情になった。

その間に相手を一通り観察した。見たところ七十歳前後と思われる女性だった。皺の多い顔は永年戸外で働いてきた人らしくすっかり日焼けしており、白髪の目立つ頭髪を荷造りのヒモのようなもので無造作に束ねていた。右耳の下に苺のような形と大きさの痣があったが、若い頃はそれなりの家庭に育った女性と思われ細面の顔立ちは整っていた。ひどくやつれた様子だったから、年齢はもう少し若いのかも知れない。痩せた体を着古した白地のワンピースに包み、灰青色の薄汚れたエプロンをつけていた。訪問相手の年齢欄に三十七歳と記されていたのを思い出した。およそ化粧っ気のないこの女性はおそらく本人の母親だろうと見当をつけた。

「どちらさまでしょうか」

女性が同じ言葉を繰り返した。もっともな質問だったが、

本人以外の家族にこちらの身分や依頼主の名称を告げることは禁じられていた。

永年掛けて身につけたタイミングでさりげなく玄関に入り、相手に気づかれぬよう目だけを動かして室内を観察した。靴箱の代用と思われる粗末な木製の棚にかかとのすり減った女性用の靴が一足、ひどく汚れたスニーカーが一足、棚の天板に野花を生けた牛乳瓶が一本……ただ、それだけだった。他には何一つ調度と呼べそうなものは見当たらなかった。「特筆すべき家財皆無」と記憶のメモに記入した。

「伸二さんはご在宅ですか」

素知らぬ顔をしてもう一度聞いた。相手は考え込む表情になった。

「あの……」と、女性は再び口ごもってから思い切ったように言った。「伸二がまた何か悪いことをしましたか」

相手は明らかに勘違いしていた。おかげで「西塔伸二」がどういう種類の人間なのかよく分かった

「いえ、警察じゃありません。別の用件で伺いました」

私の人相風体はどうやら私服刑事に見えるらしい。以前にも度々警察の人間に間違われた経験があった。話の流れによっては面談者の誤解をあえて訂正しない場合もあったが、訪問相手の家族と面談したときにはそんな身分詐称は許されなかった。

「お金の話でしょうか」

しばらく間を置いて女性が聞いた。やはり警戒しきった面持ちだった。

「ええ、お支払いの関係についてご本人様にお聞きしたいことがございまして」

厳密に言えば家族に訪問の目的を話すことも禁じられていた。しかし、相手と会話を続けるためには多少の情報は知らせる必要があった。

「どれくらい残っているんですか」

「それは私どもには知らされていません。伸二さんのご都合をお聞きして先方に伝えるよう指示されています」

負債の中身についてスタッフが事前に知らされる事例はほとんどなかった。個人情報の保全という原則が機能しており、訪問先について最小限の情報しか与えられないのだ。債務者の事情を言葉のやりとりのなかで上手に聞き出し、その内容を依頼主に報告するという限定された業務を行うのがこの仕事の一応の建前だった。

「実は……」と、女性は躊躇する口ぶりで切り出した。

「伸二は今ここにはいないんです。何も言わずに家を飛び出してしまって連絡一つよこしません」

お決まりの科白だった。訪問した家庭の半数で家族の口から同じ答えが返ってくる。

「それはいつ頃からですか」

ここは型どおりの質問をした。

「夏頃です。確か七月の末だったと思います。煙草を買ってくると言って出たきり帰ってきません」
「それっきり連絡がないんですね」
「電話一本よこしません」
「携帯の番号はご存じないんですか」
「伸二は携帯電話は持っていなかったと思います」

本人は住んでいないと言って金銭がらみの訪問者を追い返す手口は、ローン事故を抱える家庭のいわば常套手段だった。周辺の家に聞き込み調査をして真偽を確認する場合もあったが、ここではその必要はないと判断した。女性は失踪した息子の安否を本気で案じている様子だった。十年以上もこの仕事をして身につけた勘とでもいうのだろうか。私には目の前の女性が真実を語っていると確信できた。
「伸二さんがいなくなってから、こちらに人がたくさん来ましたか」
「ええ、何人もお見えになりました。全然知らなかったのです。何だかあちらこちらでお金を借りているようで。督促状もどっさり送りつけられてきて驚きましたが、事情が分からないのでそのままにしてあります」
すべて予想した通りだった。「西塔伸二」は絵に描いたような多重債務者で、到底回収が期待できるような相手ではなかった。なぜ、それほど金が必要だったのか。思わず聞きそうになったが相手の気持ちを考えて言葉を呑み込んだ。使い込み、女、ギャンブル……答えはどうせそうした類だろうが、そのことを母親に問い糺すのは酷というものだ。
「お母さんは年金で生活されているんですか」
どう見ても定収入のある家庭ではなさそうだった。女性の暮らし向きを知ろうと無遠慮な質問をした。
「国民年金は幾らか払いましたが、年金が貰えるほどにはなりませんでした」
「そうですか」
「お父さんの古い知り合いが気の毒がって週に三回その人の店で働かせてくれます。幾らにもなりませんが、私一人だけなら何とか食べていけます」
余計なことを聞いたと後悔したが、本人の家族が生活保護を受けているかどうかは知っておくべき情報だった。女性はかろうじて自活していた。
「とにかく伸二さんがいらっしゃらないんじゃ仕方ありませんね」
話を切り上げるつもりで投げやりな言葉を口に出した。
「ご迷惑を掛けて申し訳ありません。いつになるか分かりませんが、本人が戻ってきたとき何か伝えることはありますか」
「そうですね」

帰るわけがないと口には出さずつぶやいた。「西塔伸二」という男がこの家に帰ることがあるとしたら、それは親が死んだときだろう。家が親の所有物ならそのときは戻ってきて自分の被相続権を強硬に主張する……おそらくその手のろくでなしに違いない。
「いえ、特にありません」
本人が不在の場合に家族に手渡す文書はあらかじめ用意していた。しかし、このケースではそんなことをしても無意味だと考えた。「西塔伸二」はまず帰ってこないだろうし、帰ってきたとしても債権者に連絡してくる可能性は皆無に近かったからだ。どこか山中の作業員宿舎で負債処理のためのただ働きをさせられている男の姿が目に浮かんだ。
いずれにせよその場にいる理由はもうなかった。本人行方不明の報告書を提出すれば私の仕事はそれで終わる。金融機関の担当者がその書類を未決案件の膨大なリストに再度加えるか、あるいは「回収不能」のファイルに綴じ込むことで「調査」は終了する。
「わざわざ足を運んでいただいて本当に申し訳ありませんでした」
女性は折り目正しく詫びの言葉を口に出して深々と頭を下げた。やはり以前はそれなりの暮らしをしていた人なのだろう。債務者の家庭を訪れて、そんな風に丁寧な言葉を聞く機会はほとんどなかった。支払い不能の状態に陥った家庭にとって、私のような立場の人間はいわば疫病神だ。罵声が飛んでこなければ幸いで、大抵は冷ややかな沈黙に直面して退散することになる。
「仕事ですから。こちらこそ突然お邪魔して大変失礼いたしました」
丁重な言葉には丁重に返し、一礼して帰りかけたとき、
「以前はあんな子じゃなかったんです」
突然、女性が口を開いた。私はふり返って相手の顔を見た。
「おとなしいお兄ちゃんと違って少しやんちゃで勉強もできませんでしたが、家族思いの気持ちの優しい子でした。お兄ちゃんが誰かに虐められると、仕返しだと言って棒きれ持って飛び出したりして……」
たまたま訪問した家の人間から身の上話を聞かされることは、相手が女性の場合にはしばしばあった。聞き流してさっさと帰ってもよかったが、私はそういう場合なるべく話を聞くことにしていた。おそらく自分の仕事に後ろめたさを感じていたのだろう。話を聞くのは私にとってささやかな罪滅ぼしだった。
土壁の剥げ落ちた殺風景な玄関に入り直して、私は女性のほうに顔を向けた。
「あれの父親は腕のいい大工でしたがお金を稼ぐのは下手でした。何度も他人に騙されて大損して、それでも愚痴を言うでもなく黙って仕事をしている人でした。おかげで家

にはいつもお金がなくて……」
「そうですか。ご主人は大工さんですか」
それで納得した。大工の住まいはなぜかボロ屋で、土建屋の家は豪邸と相場が決まっていた。この場合もその法則に合致した。
女性は縛った髪に何度も手を触れながら遠くを見る目になった。
「貧乏過ぎたのがいけなかったのでしょう。子供たちに綺麗な服の一つも着せてやれなくて。兄弟二人ともいつも学校でバカにされていたんだと思います。給食費も払えなくて市から補助を貰っているような状態でしたから。お兄ちゃんは自分で将来のことを考えていたのでしょう。父親に似て無口でしたが、親に言われなくてもいつも一生懸命勉強していました。伸二のほうは負けん気が強くて友だちと喧嘩ばかり。でも根は気持ちの優しいいい子だったんです。あれが中学二年生のとき父親が亡くなりました。手がつけられなくなったのはそれからです……」
女性の繰り言はいつまでも続きそうに思われた。母親がろくでなしの息子を庇おうとする場合、話の筋書きは申し合わせたように同じパターンだった。貧乏、片親、本当はいい子の三つのキーワードが、どんなストーリーのなかにも必ず織り込まれていた。この十年、私はその手の話を幾百となく聞かされており、聞きながら次の展開を正確に予想することができるほどだった。
彼女の気が済むまで話を聞いてやりたかったが、これ以上玄関先に立っている体力は残されていなかった。足が硬直し膝の辺りに危険な痙攣が出はじめていた。
「子供さんはお二人ですか」
両膝を固く合わせて私は相手の話を遮った。本音は早々に退散したかったが、家族に関する情報は重要でそれだけは聞いておく必要があった。
「そうです。子供は男二人です」
「お兄さんはどこに住んでいるんですか」
「お兄ちゃんは自分で働いて大学まで出ました。そのまま東京の会社に勤めて埼玉の方に住んでいます。結婚して娘が二人いるようですが、こちらには帰ってきません。二年に一度くらい電話があるだけです」
「一度もですか」
「はい、一度も帰ってきません。多分、自分の家族に実家の貧しさを見せたくないんだと思います。薄情なものですが貧乏させたこちらが悪かったのだとあきらめています。私が死んだときは葬式くらいは出してくれるでしょう」
女性は嘆息して目を拭う仕草をした。ひどく情けない表情をしていた。
家族のことを聞くのは、債務者に代わって返済を継続する可能性のある人物がいるかどうかを判断するためだ。し

かし、女性の話を聞く限りそれはなさそうに思えた。苦学して何とか自分の居場所を築き上げた兄が、出来の悪い弟の債務を代って返済する可能性はまずなかった
兄の話をするとき女性の口ぶりはどこか恨みがましく、ろくでなしの弟を庇う態度とは対照的だった。それが母親というものなのだろうと、自分も親不孝な長男だった私は妙に納得した。
もう聞くべきことはすべて聞いた。膝の痙攣は治まらず、一刻も早く外に出たかった。
「分かりました。これで失礼いたします」
まだ何か言いたげな相手に機先を制して、その場を辞去する言葉を告げた。
「本当に申し訳ありません」
女性は同じ詫び言葉を繰り返して再度深々と頭を下げた。見通しのない家庭の事情を口に出したせいか、彼女の顔は正視するのがつらくなるほど哀しげだった。
「伸二さんも困ったものですね。早く帰ってくればいいのに」
同情するつもりでそう言うと、女性はこちらをにらみつける表情になった。
「待ってやるしかありませんよ。あれも帰ってくる場所がないと困るでしょうから」
強い響きの言葉だった。帰ってこないのはお前たちのせいだという気持ちが、その言葉のなかに込められているのを感じた。彼女の激しい怒りの感情は明らかにこの私に向けられていた。
「失礼します」
私はたじろいで女性の顔を見つめ、やっとそれだけ言って玄関先から立ち去った。
石段をほとんど四つん這いになって上り、何とか生け垣の道に戻った。ただそれだけのことで息が切れた。ふと頭上を見上げると辺りはすっかり夕暮れになっていた。雲の切れ目から朱に染まった夕日の断片がわずかに見え、弱々しい光に映し出された町のシルエットがなぜか絶望的な気分を誘った。帰り道には長い上り坂が控えていた。そのことを思うだけでも暗い気持ちになったが、膝の痙攣はこの瞬間自分が直面している深刻な現実だった。残された力で車を置いた駐車場まで辿り着くのは、ほとんど至難の業に感じられた。それでも痛む足を引き摺りながら坂を上りはじめた。
女性が最後に言い放った一言が頭から離れなかった。彼女がなぜ私の言葉に腹を立てたのか、そのことばかりを考えながら歩いた。私自身は相手の気持ちを斟酌(しんしゃく)して、彼女の出来の悪い息子を批判したつもりだった。ところが彼女はこちらの気持ちを正面から拒否し、逆に強い憤りの感情

をぶつけてきた。その理由を考えようとした。

最初、彼女は私の訪問を明らかに怖れていた。何度も悪質な金融業者と応対した一人暮らしの女性としては当然の反応だ。ところがいつもと異なりこちらの言動が思いの外穏やかだったので、つい気を許して立ち入った家族の事情まですっかり話してしまった。彼女は次男坊が逐電してからずっと心細くて仕方なかったのだ。自分の気持ちを誰かに話したくても聞いてくれる相手がどこにもいない……そんなときに丁寧に接してくれる人間と出会えば、構える姿勢が緩んで身の上話をしようという気にもなる。おそらくそんなことだったのだろう。

本当のところは彼女が抱いた気持ちはいわば錯覚に過ぎなかった。相手に接する態度がどうであれ、つまるところ私は彼女の息子が抱える負債を取り立てようとする金融会社の代理人に過ぎなかった。私の最後の一言が女性にそのことを思い起こさせたのだろう。彼女はささやかな意地を発揮して、債権者の手先などに同情されたくないという気持ちを伝えたのだ。

どんな場合でも軽い気分で訪問先を去ることはあり得ない仕事だった。相手が抱え込む経済的な難問とつらい気持ちの何某かを背負って歩く帰り道は、永年続けて慣れているとはいえやはり沈んだ気持ちが支配した。しかも間断なく襲う足の痛みは歩いているうちに次第に強まり我慢の限界を超えた。ほとんど十メートル毎に立ち止まって休みながら何とか坂道を上ったが、往路で立ち往生した場所まで来てとうとう力が尽きた。もう一歩も歩けそうになかった。

先刻と同じようにガードレールに両手をつき、その場に蹲って呼吸を整えた。晩秋の冷気のなかでも流れる汗は止まらず、ハンケチを取り出してそれを拭う力さえ残っていなかった。例の発作が出ないのだけが唯一の救いだと思った。しばらく休んでいるとようやく息切れだけは治まった。試しに立ち上がるといきなり膝の関節が激しく痙攣した。救急車が必要なのはまさしく今だなと、進退窮まった気分で考えた。ガードレールに手をついたまま顔を上げ、ふと道の向こう側に目をやった。半ば霞んだ視界のなかに見慣れない建物が浮かび上がった。

家屋が密集するこの界隈にしては間口の広い建物だった。正面は焦げ茶色に塗られた板壁に被われ、窓の配置を見る限り三階建に見えた。しかし、白く塗られた日除けの格子戸が嵌った二階と三階の窓はガラスがなく、明らかに装飾のためのダミーだった。山小屋を意識したのかも知れないが、建物から受ける印象は都会風の洒落た山小屋ではなく、むしろ高山に見られる粗末な避難小屋に似ていた。永年手入れもされず放置されてきたのだろう。板壁の塗料が無残に剥げ落ち、下地の白い塗料が一面まだらに透けて見えて

いた。全体にどこか芝居の大道具じみた印象で安っぽい感じがした。

辺りは暗くなっており、壁面に設けられた照明用の電灯が点いていた。黄ばんだ光に照らされた板壁に、白い飾り文字で「純喫茶　白鳥」と記されているのが見えた。「純喫茶」はいかにも古めかしく懐かしい言葉に思えた。若い頃、「白鳥」という名称の喫茶店はどこの町にも一つくらいはあった。しかし、それが目の前に実在しているのは不思議な感じだった。以前この町で仕事をしていたとき、何度も坂道を車で往来していたはずだ。当時この店の存在には一度も気づかなかった。日中の光のなかではそれほど影の薄い店なのか。あるいは極度の疲労と痛みが原因で、知らぬうちに遠い昔の世界にタイムスリップしてしまったのか……そんなあり得ないことまで考えた。

店の前面はやや腰高の格子窓になっており、木製の窓枠も外壁と同じ焦げ茶色に塗られていた。窓は淡グレーの厚手のカーテンに被われて、内部の様子を窺うことはできなかった。右手にある出入り口のスイングドアから白熱灯の柔らかい灯りが漏れ、その光の具合がこの上もなく優しい雰囲気を醸し出していた。あの店に入ってみたいと、なぜか無性にそう思った。もう一度立ち上がってみると、膝の痙攣はどうやら治まっていた。試しに数メートル先の横断歩道まで歩いてみた。痛みはまだ残っていたが、道の向こう側まで何とか歩けそうな気がした。

夜間は通行量の多い道ではなかった。しかし、時折坂道を上ってくる車はスピードを出しており、見通しの悪いこの時間帯の路上はかなり危険だった。左右を慎重に見て上下の往来が途絶えたところで一息に道を渡った。たったそれだけのことが私にはほとんど命懸けの綱渡りくらいに思えた。息を弾ませながら喫茶店の前まで歩いた。一枚ガラスのドアに「営業中」と黒い文字で記された木札が吊り下げられていた。ドアを押して店に入ると、バッハの管弦楽がやっと聞き取れるほどの音量で流れていた。

「いらっしゃいませ」

控えめな女性の声が出迎えた。すべて悪くない印象だった。これこそ昔どこかの町にあった名曲喫茶の雰囲気だ。

柔らかい声で出迎えた女性は、七十歳を少し過ぎた年格好でずんぐりした小太りの体型をしていた。見たところ服装も旧式だった。濃紺色のワンピースから縁にレースの飾りのあるブラウスの襟を出し、淡いピンクのエプロンをつけた古めかしいスタイルの衣装が、店の女主人と思われるその女性にはよく似合っていた。

「タバコお喫いになりますか」

そう言いながら色白のまん丸い顔に浮かべた微笑もごく自然だった。

「はい、喫います」

窓際のボックス席に案内された。外装と同じ焦げ茶色のビニールが貼られたシートに腰を下ろした。
「お疲れの様子ですね」
「ええ、少し疲れました」
シートの具合は意外に心地よく女性の言葉も押しつけがましさはなかったから、こちらも素直に応答した。
「決まりましたらお知らせ下さい」
女性はテーブルにメニューリストと灰皿を置いて、ゆっくりとした足取りでカウンターに戻った。
タバコに火を点けて深く吸い込み一息で煙を吐き出した。メニューを見る前に周囲を一通り見渡してみた。裏手は住居になっていると思われ、奥行きはそれほどなかった。案内された席と同じ四人がけのボックスシートが九組、店内に三組ずつ三列几帳面に並べられていた。外装に似つかわしく店のなかもひどく古びていた。白く塗られた天井はタバコのヤニですっかり黄ばみ、小さな花柄を散らした壁紙も永い歳月に黒ずみ元の柄がよく分からないほどだ。掃除だけは行き届いている様子で荒廃した印象はなかった。店全体のくすみ具合が疲れ切った私にはむしろ心地よく感じられた。
左手に不自然な空間があった。おそらく以前はもう一列同じボックス席が置かれていたのだろう。それを撤去した跡と思われる幅三メートルほどの細長いスペースがあり、一番奥に小さなステージ台が設置されていた。壁に嵌めこまれたステージは半径一メートルくらいの半円形で高さはせいぜい十センチ程度のごく小さなものだった。頭上にはステージの大きさに見合った小粒のミラーボールまで吊り下げられていた。スタンドマイクが二本とそれに接続された通信カラオケの機器もセットされており、その設備だけが昔の喫茶店と違って当世風だった。
出入り口の向こう側はカウンターになっていた。型どおりの造りで奥にガラス戸の入った棚があり、なかにコーヒーカップやよく磨かれた大小のグラスが並んでいた。お酒も出す店らしく、カクテルベースのジンやテキーラの大瓶、それにリキュール類の小瓶やシェーカーなども棚の一画を占めていた。ドリップ式のサイフォンを幾つも並べたカウンターの前に、背の高い老人が気難しい表情を浮かべて立っていた。店主と思われるその男性は白のワイシャツに茶のズボンを穿き、マドラスチェックのベストを往年の洒落者といった風情で着こなしている。奥の調理台では先ほどの女性が何やら立ち働いており、二人の対照がいかにも古い喫茶店を切り盛りする老夫婦らしくいい味を出していた。
メニューリストを開いてみた。とりたてて風変わりな品はなかった。ブレンドコーヒーにアメリカンコーヒー、トマトジュースやレモンスカッシュ。カレーライスにナポリタン……要するに昔のままの喫茶店のメニューだ。末尾の

ほうにセットメニューとあり、お好み焼きセットと焼きそばセットの二つの品が写真を添えて掲載されていた。七八〇円のその品だけが少し変わっていた。
「お願いします」
カウンターに向かって声を掛けると、女性がステンレスの小さなトレーに水の入ったグラスを持ってやってきた。
「お好み焼きセットを下さい」
「ありがとうございます。お好み焼きセットですね。かしこまりました」
おそらく彼女の自慢の一品なのだろう。女性は満面に笑みを浮かべ、やや高い声で注文を繰り返した。
「関西のご出身なんですか」
相手の言葉にかすかな関西なまりがあるのに気づいていたから聞いてみた。
「はい、神戸で生まれて育ちました。お客様も関西の方ですか」
「僕は大阪です」
「こちらへはお仕事か何かで」
「いえ、ずっとこちらです。十八の歳に家を出てきましたから」
「そうですか」
軽く頷きながら女性はカウンターのほうに戻った。会話に深入りしないで適当なところで切り上げる間の取り方が絶妙で、いかにも客商売を永年続けている人らしい程のよさが感じられた。
オーダーした品が出てくるまで、もう一服タバコを点けて待った。のんびりした気分になっていた。肩の辺りにずっとわだかまっていた悪性の疲労がゆっくり溶けていく感じは悪くなかった。暖かい場所にいるせいか足の具合も少しはよくなったような気がした。仕事の途中でこんな風にどこかの店で食事をするのは久しぶりだった。退院以来毎日の仕事を消化するのが精一杯で、気持ちの余裕がなかったからだ。朝、家を出る前にトーストとインスタントコーヒーのいい加減な朝食を摂った。思い返してみるとそのときから何も口にしていなかった。トイレ休憩で何度かコンビニに立ち寄ったが菓子パン一つ買わなかった。まるで何かに追い立てられるような気分に駆られ、ひたすら次の目的地に急ぐ一日を過ごしていたのだ。
やがて注文の品がテーブルに運ばれてきた。大きめの黒いお盆にお好み焼きが一皿、コーヒーと小鉢に入ったコールスロー、それがメニューのお好み焼きセットだった。厚めに焼かれたお好み焼きは青海苔と鰹節でしっかりトッピングされ、お決まりの紅生姜も添えられていた。味付けはおそらく定番のお多福ソースだろう。
「へえー、本格的だ」

思わず感動の言葉が口に出た。
「はい、大阪風にしてみました」
「懐かしいです。子供の頃お店で食べたお好み焼きの匂いがします」
「気に入って貰えました」
サービスのつもりなのか今度は明瞭な関西弁だった。女性はあの邪気のない笑顔を浮かべてこちらに会釈し、やはりゆっくりした歩調でカウンターに戻った。
お盆に乗せられた小ぶりのコテでお好み焼きを六等分し、すくい取った一片にかぶりついた。大腸を切ってからすっかり感覚をなくしていた消化器がめずらしく強い空腹を訴えていた。そのまま息もつかずに食べ続け、気がつくと皿は空になっていた。コールスローも残らず平らげ、店主の煎れたコーヒーを飲んでようやく気分が落ち着いた。
道ばたに蹲っていたときに比べ、頭脳の働きも活発になり体調は格段によくなっていた。不調の原因は簡単だった。ろくに食べずに働き続けたのが拙かったのだ。消化器の故障はそんな当たり前のことも体に教えなくなってしまうらしい。コーヒーをもう一口飲んだ。少し冷めていたが煎った豆の味がはっきり出ていて美味だった。コーヒーに詳しいわけではなかったが、おそらくあの気難しい顔の店主はその道の名手に違いないと思った。
しばらくぼんやりしていた。仕事もすべて終わり後は家に帰るだけだったが、この場所で感じているいい気分をもう少し味わっていたかった。医者からは禁じられているタバコをさらに一服点けて店内を見渡した。客は相変わらず私一人だった。住宅地から駅に通じる道路に面した好立地だ。以前はこの近辺でかなり繁盛していた喫茶店だったに違いない。開店したのは四十年以上も前だろうか。山林を広範囲に造成した宅地に次々と家が建ちはじめた頃で、町は若くそこに住む人達も活気に溢れていた時代だった。当時この店は元気な生活者達の貴重な交流の場だったのだろう。しかし、変化は急速にやってきた。経済の成長につれて車を普通に使う社会になり、幹線道路の道沿いにファミリーレストランが何軒も建った。そして、店内に設けられたドリンクバーが市街地の喫茶店をあっという間に廃れさせた。
人付き合いは下手なくせに詮索好きの私は、そんな時代を生き抜いてきた老夫婦のことを考えた。愛想のよい神戸出身の女性が、どんなきっかけでカウンターに立つ店主と結びつき、どのような経緯でこの町に喫茶店を開業したのか……様々な想像のドラマが頭のなかを忙しなく交錯した。平坦な道程ではなかったはずだ。しかし、この店を満たしているいい雰囲気は、二人が力を併せて何とか苦難を乗り越えてきた歴史を感じさせた。負債は完済されているのかも知れないが、店の様子を見る限り資金的な余裕はなさそうだ。カウンターに立つ店主の表情には小さな店を切り盛りする経営者の苦悩が刻み込まれており、関西出身の妻が持つ柔らかい雰囲気がそれを包むことによってこの店独特の味を出していた。そんな夫婦が二人でいる情景は、弱った気持ちでいる私の心を和ませた。

とりとめもない思いを弄びながらタバコを喫っていると、ふいに出入り口のドアが開く物音がした。そして、冷たい外気とともに賑やかに談笑する声が店内に入ってきた。ようやく新来の客のようだ。ふり返って見ると客は四人だった。いずれも茶や黒の地味な色彩のコートを着ていた。男が二人に女が二人……二組のカップルと呼んでもいい雰囲気に見えたが、客は全員七十歳はとうに過ぎていそうな老人ばかりだった。どうやら店の常連らしく女主人とのやりとりも親しげで、カウンターに立つ気難しい店主までが笑顔になって会話に加わっていた。
「いつもの場所ね」
女性客の一人が軽い口調でそう声を掛け、四人は重なるようにひとかたまりになって店の奥のほうに移動した。
さっき店内を観察したときには気づかなかったが、よく見るとステージ台の右手にごく手狭な窪みのような空間があった。そこには他のと同じ焦げ茶色のシートが向かい合わせに三脚ずつセットされ、間に細長いテーブルが一つ置かれていた。貸切席とでも呼ぶのだろうか、老人たちのグループはその場所に慣れた様子で入ってそれぞれ席についた。やはり男女一組ずつ向かい合わせに座る様子も不自然さはなかった。
コートを脱いだ四人を見たとき私は驚愕した。全員が恐ろしく奇妙な服装をしていたからだ。
男二人は腰にスリットの入った黒いズボンを穿いていた。痩せ形の一人はコミック風に描いた狐のような顎の尖った顔立ちで、白いドレスシャツの上に花柄を散らした薄茶色のベストを着て、黒の紐タイを気障な結び方で締めていた。いかにも商店主上がりらしいこまめな人物という感じだ。もう一人の大柄な体格の老人は顔の造作が全部中心に集まったような大きくて立派な赤ら顔で、永年体を使う仕事をしてきた人らしく腕の太さが半端ではなかった。抽象柄に織り上げた派手な銀色のシャツを着ていたが、襟元が大きく開いたデザインで白髪まじりの胸毛が襟の合わせ目からちらりと見えていた。グループのなかでは一番年嵩らしく八十歳は過ぎていそうで、こちらのほうはいわば歳を経た大狸というところだった。
女性のほうはさらに派手さが際立っていた。白髪の目立つ小柄な女性は昔はさぞやと思わせる美人顔で、体にぴったり貼りついた金ラメ入りの黒のロングドレスを着ていた。その様子は老人介護施設に入所したマレーネ・デートリッ

ヒとでもいいたくなるような風情に見えた。他方、小太りのほうはいかにも客商売上がりの気の強そうなおばさんで、腹部に黒いアゲハチョウを染め抜いた紫色のやや丈の短いドレスを着ていた。妖艶な夜の蝶という思い入れだろうが、お腹の辺りがぽっこり盛り上がっているせいで蝶というよりむしろ岩肌に貼りついたコウモリを連想させた。

一年中町を歩いていたから、ずいぶん風変わりな服を着た人間にも数多く出会った。しかし、この四人の老人たちがどういう性格のグループを構成しているのか、さしあたり見当もつかなかった。私はカップに残ったコーヒーをちびちび啜りながら、好奇心をフルチャージしてなりゆきを見守った。

四人が落ち着くのを見計らったように女主人が席に歩み寄った。

「いつものやつ四つ」と、大狸が元気よくオーダーした。その様子がまるでコンパに集った若者のように楽しげでどこか微笑ましい感じがした。

「いつもの四つ」

女主人がカウンターに向かって声を掛けた。即座に反応した店主が背後の棚から大ぶりのグラスを次々に取り出し、出入り口近くに置かれたサーバーの前に運んだ。カウンターに戻った女主人が四つのグラスに手際よく生ビールを注いだ。琥珀色に満たされたそのグラスを店主がカウンターの上にきちんと横一列に並べた。そこへ客の男二人がやってきてグラスを二つずつ持ち、経験を積んだウエイターのような軽い足取りで女二人が待つテーブルに運んだ。その一連の手順が流れるようにスムーズだった。私は半ばあっけにとられながら、どこか感嘆の気持ちを抱いて老人たちの様子を見守った。

「かんぱーい」

大狸が勢いよく音頭をとり、一同がグラスを合わせた。どうやらこの場所でコスプレ老人たちの宴会がはじまるらしい。

女主人がつまみの小皿を席に運び、その場に立ったまましばらく老人たちのやりとりに加わった。「お稽古」という言葉が何度か会話のなかに出てきたような気がしたが、それでもまだ私には老人グループの正体を見極めることができなかった。

しばらく談笑の時間が続いた。その情景を見ているうちに不思議な気分になった。四人の老人は自分たちの時間を心底から楽しんでいるように見えた。そのこと自体が私には驚きだった。自分が生きてきた道を顧みて、そうした時間を持つ機会が一度でもあっただろうかと考えた。しかし、過去の体験のどこを探ってみてもあんな風な純粋な楽しみの時間を過ごした記憶は見出せなかった。あの歳になれば自分にもそんな時間が手に入るのだろうか。七十歳までに

はまだ少し時間の猶予があったが、老人たちのような楽しみを体験する可能性はなさそうに思われた。ガンの手術をして打ちのめされた気分でいる今の私には、その歳まで生きていられるかどうかの確信すら持てなかったからだ。

そのとき老人たちのお喋りが突然止み、金ラメのデートリッヒが立ち上がってステージ台のほうに歩み寄った。彼女はカラオケ装置の前にしゃがみ込み、慣れた手つきで選曲の操作をした。前奏の曲が流れ出すと同時に紐タイとアゲハチョウのカップルがステージ台の前に進み出て、向かい合って丁寧に一礼した。デートリッヒが戦前の古いブルースを歌いはじめ、カップルが互いの腕を取って踊り出した。うかつなことにそこでようやく気づいた。高齢者の間に社交ダンスが流行しているという話をどこかで聞いたことがあった。老人たちはどうやらその社交ダンスのグループらしい。人目を惹く奇妙ないでたちはダンスの衣装だったのだ。

デートリッヒの歌は上手だった。年齢のせいで声量はなかったが音程はしっかりしており、何よりも人生を積み重ねてきた人だけが表現できる哀感が滲み出ていた。カップルのダンスも悪くはなかった。ぎごちなさはなくステップはしっかりリズムに乗っており、歌い手の醸し出す情感を正しくとらえて狭いフロワーを縦横に踊っていた。古びた喫茶店がいきなりダンスホールに変わり、どこか現実離れした雰囲気がミラーボールの煌めく店内を満たした……やがて歌が終わり踊り手は再び向かい合って一礼した。私は不思議な気分に囚われ、知らず知らずのうちに老人たちに拍手を送っていた。屈託のない笑顔が三つこちらに向き、なぜかデートリッヒ一人だけが立ち止まって親しげな会釈を返した。

再びお喋りがはじまった。ダンスの出来映えを批評し合っている様子で、四人とも真剣な表情で手振りを交えて話し込んでいる。

「お代わり下さい」

大狸が相変わらず元気な声で生ビールのお代わりを注文した。そこで一悶着はじまった。

「酒は一杯だけの約束でしょう」

紐タイがしきりに咎めている。

「いつもそうなんだから。あなたは飲み過ぎるとだらしなくなるからダメ……」

アゲハチョウが立ち上がってお説教をはじめた。どうやら他のメンバーは老人がお代わりをすることに反対らしい。

しかし、年季の入れ方が違うせいか大狸は平気な顔だ。仲間の意見を聞き入れる様子はなく、困り顔の女主人を呼んで半ば強引にお代わりのグラスを運ばせた。デートリッヒはそっぽを向いてふて腐れ、他の二人もあきれ顔でグラ

スを抱えて上機嫌の老人をながめている。
どういうことになるのか見ていると、デートリッヒが紐タイに何か話し掛けてから立ち上がった。そして、思い切ったようなしっかりした足取りでこちらにやってきた。
「お加減はどうですか」
彼女は私の前で立ち止まり、歌声と同じ少しハスキーな声でそう話し掛けてきた。
「はっ……」
生返事を半ば口に出して相手の顔を見上げた。デートリッヒはどこか恥ずかしそうな表情だった。私のほうはわけが分からず困惑していた。
「ずいぶんつらそうなご様子でしたから心配していました。さっきよりお元気そうですね」
「ああ」
そう言われて気づいた。彼女は下り坂で躓っていたときに声を掛けてくれた女性だった。薄化粧してダンスの衣装をつけていたから見分けがつかなかったのだ。
「あのときは本当に失礼しました」
私はすっかり狼狽して立ち上がり、彼女に向かって何度も繰り返し頭を下げた。
「気にしないで下さい。具合の悪いときはお互いさまですから。私のほうこそ声をお掛けしてかえってご迷惑だったかと気にしておりました」
「いや、あの……」
私は次の言葉が出せず、ひとまず相手に席を勧めて自分もシートに座り直した。
「病み上がりで無理に仕事をしていましたので、あそこで立ち往生してしまいました。ずいぶん失礼なことを言ったと後でよくよく後悔しました」
とりあえず詫びたもののバツの悪さは拭えなかった。
「平気ですよ。つらいときはそんなものです。私も覚えがありますわ」
彼女は気にした様子もなく、やはり少し恥ずかしそうな笑顔をこちらに向けた。
「ダンスをおやりなんですか」
何とか話題を変えようと間の抜けた質問をした。目の前でダンスと歌を楽しませて貰って、いまさら聞くまでもないことだ。
「ええ、駅前にダンス教室がありまして、私たち週に一度そこへ通っているんです。あまり下手くそだと先生に申し訳ないでしょう。だからここで少しお稽古するんです。踊らせていただけるお店があって本当にありがたいと思います」
「そうですか。でも皆さんお上手です。見ていて感心しました」
「いえ、全然ダメですよ。ご覧のとおりみんな年寄りでしょう。体が動かないしリズム勘も鈍くなって、若い人のようには踊れません。上手な方のダンスを見るとがっかりしてしまいます」
デートリッヒは意外に饒舌だった。おかげで少し気持ちが軽くなった。
「いやー、本当に申し訳ありませんでした。折角お声を掛けていただいたのに失礼なことを言いまして」
あらためて詫びると彼女は意味ありげな顔になって声を潜めた。
「じゃ、お詫びのしるしに私と踊っていただけます」
「はあ」
意外なリクエストにさすがに驚いた。どうやら彼女は私をダンスに誘っているらしい。女性からダンスに誘われるなどという経験はこの歳まで一度もなかった。今度は本当に困惑して相手の顔をまじまじと見つめた。
かつて酒場で遊び回っていた頃、酔った勢いで店の女性たちとでたらめなチークダンスを踊った。歌って踊れる実業家を自称していたが、本当のところはただ酒癖が悪いだけの阿呆に過ぎなかった。そもそも幼稚園の頃からお遊戯の時間が大の苦手だったから、自分にダンスの才能がないことは自覚していた。しかも、デートリッヒたちのダンスは本式で私などが相手を務められるレベルではなかった。
「あなたにはパートナーがいらっしゃるでしょう」
そう言うと彼女は哀しげな表情になって貸切席のほうに顔を向けた。
「ええ、いるにはいるんです。でもあんな具合ですから」
見るとビールをお代わりした老人はのけぞるようにソファーによりかかり、大きな口を開けて正体なく眠り込んでいる。その姿はどう見ても飲み過ぎた大狸だ。ようやく事情が呑みこめた。酔ったパートナーが役に立たずこちらにお鉢が回ってきたのだ。
「あの方、お酒を飲み過ぎるといつもあんな風なんです。おかげでお稽古ができなくて困ってしまいます」
「だけどぼくは踊れませんよ」

御注文はアジア文化社まで

「ワルツだから簡単です。適当に調子を合わせていただければいいんです」
「そうですか……」
　ワルツもジルバも踊れないことでは同じだったが、いやだとは言い難い空気を感じた。それはこの時間を楽しんでいる老人たちの気分に水を差すようなふるまいに思えたからだ。お詫びのしるしという彼女の言葉も妙に気に掛かった。
「分かりました。お相手させて貰います。でもぼくは本当に踊れませんよ」
　踊れないことを再度強調して相手の申し出を受け容れた。デートリッヒの顔がぱっと明るくなり、指で丸い輪をつくって貸切席のほうに合図した。
　紐タイがうなずいて立ち上がり、何やら意味ありげな笑いを浮かべてカラオケセットの前に歩み寄った。そのフットワークの軽さはやはりこまめな商店主を想起させた。
　すぐに前奏の曲がはじまりデートリッヒが澄まし顔で私の手を引いた。
「さあ、踊りましょう」
「はい」
　狭いダンスフロワーに進み出ると、紐タイが何十年も前に流行ったワルツの曲を渋い声で歌い出した。即席のパートナーの手をぎこちなくとって踊り出したが、ステップも何もあったものではない。ただデートリッヒの動きを追いかけて右往左往するばかりだ。
「とっても嬉しい」と、彼女は感に堪えぬといった風情で囁いた。
「あなたみたいな若い男性と踊れるなんて夢のようですわ」
「下手くそですみません」
　私はすっかり恐縮し意思に反してもつれ合う足を何とかコントロールしようと悪戦苦闘した。デートリッヒは大胆に体をすり寄せてくる。彼女からは小さい頃母親の衣装ダンスを開けたときと同じ匂いがした。フロワーが狭いせいで何度もターンがある。その動きにどうしてもついていけない。激しく動いているのになぜか膝の痛みは消えていた。少なくともダンスには足の痛みを軽減する効能があるらしい。
「ダンスをする男の人って貴重なんです。だからあんな大酒飲みのおじいさんでも捕まえておかないと」
「はあ」
「あの方、お酒が過ぎるときっちり三十分眠り込んでしまって、その間はどんなことをしても起きないんです」
「なるほど」
　デートリッヒは貸切席をちらりと見て眉をひそめる仕草をした。彼女は満足しきった表情だった。どう考えてもパ

ートナーとしては不足な私とのダンスを心から楽しんでいる様子で、こちらのほうはますます申し訳ない気分になった。
　しばらく踊っているうちにやっとリズムをつかんだ。ずっと以前にある物好きな女性から二日間だけダンスを習ったことがあった。彼女が出した結論は「あなたには無理」という無慈悲なものだったが、そのとき習ったことを少しは思い出したのかも知れない。多少なりとも格好がつくと、もともと軽薄な私は老後のダンスも悪くはないかも知れないと思いはじめた。
「こんな風に歌謡曲で踊るのは禁止されているんです。ちゃんとしたダンスの曲で踊りなさいって先生に言われています」
「そういうものですか」
「でも平気です。どうせ私たちのダンスはお遊びですもの。楽しめればそれでいいんです。だからこのお店はとっても大事」
「いいお店ですね」
「そうでしょう。私たちみんなこのお店の大ファンなんですよ」
　カウンターのほうを見ると店主夫婦も笑顔になってこちらをながめていた。ダンスはその場所にいるみんなを楽しませるものらしい。
「私たち、週に一度だけ不良になるんです。お酒を飲んで他所の旦那や奥さんとダンスを楽しむんです。みんな年金暮らしでお金なんかありませんが、他に贅沢するわけでもないし。家のおじいさんが見たら腰を抜かすでしょうが、気にしないことにしています。何十年も家族のために苦労してきたんだから、死ぬ前に少しくらい楽しんでもバチは当たりませんわ」
「おっしゃるとおりです」
　デートリッヒはやはりお喋りだった。踊りながらひっきりなしに耳元で囁き続ける。こちらのほうは踊るのに精一杯で相づちを打つのも苦しい。
「本当によかった。発表会が近いので今日は先生に言われて本番用の衣装をつけてきました。そんな日にあなたみたいな素敵な方と踊れるなんて私しあわせです」
　デートリッヒが大仰な謝辞を口に出して少し大きくターンした。かろうじて彼女の腕を取ったところでようやく曲が終わった。
「あちらで私たちとお話しませんか」
「いえ、もう帰る時間ですから」
　上気した顔で誘うデートリッヒに深々と一礼して自分の席に戻った。踊っているときは気づかなかったが背中が汗でぐっしょり濡れていた。ダンスとは余程体力を使うものだとはじめて知った。やはり足の痛みは感じなかった。

時刻は午後六時を過ぎていた。家に帰るための長く退屈なドライブが控えていたから、そろそろ帰る潮時だった。支払伝票を摘んで重い腰を上げた。老人たちに別れの挨拶をするつもりで貸切席のほうに目をやったとき、思わず「えっ」と叫んだ。三十分は起きないはずのデートリッヒのパートナーが目を覚まし、恐ろしい形相でこちらをにらみつけていたのだ。意味するところは明白だった。老人は「おれの女に手を出すな」と言っているに違いない。後の三人は笑いをこらえる表情で興味津々その様子をながめている。

そこでようやく彼らの企みに気づいた。どうやら私は飲んべえのじいさんを懲らしめるためのダシに使われたらしい。老人たちの目論見は的中したのだろうが、こちらのほうは大迷惑だ。こんな所で見ず知らずの老人に、二十歳も年上の女のことでにらまれる筋合いはない。

立ち上がって今にもこぶしを振り上げて駆け出してきそうな老人を、三人がしきりに宥めている。私は逃げに入って急ぎ足で出口に向かった。

「あら、もうお帰りですか」

女主人が例の愛想のいい口調で言って伝票を受け取った。明らかに彼女も笑いをこらえる面持ちだった。

「ごちそうさまでした」

「ダンスとっても素敵でしたよ」

「いえ、冷や汗ものでした」

カウンターの店主も表情を緩めてこちらのほうを見ている。要するに店主夫婦も老人たちと同じようにことの顛末を面白がって見ていたのだ。酔っぱらってパートナーを盗られた老人と相手の男……おそらくしばらくの間はこの店の語り草になるのだろう。

貸切席のほうを窺うと大狸はまだ私をにらみつけており、太い両腕の片方ずつに紐タイとアゲハチョウがしがみついていた。デートリッヒは三人の後に隠れて、「ごめんなさい」とでも言いたげにこちらに向かって手を合わせている。その様子がまるで喜劇の一場面のように決まり絵になっていた。私は苦笑して支払いを済ませた。

「また来てくださいね」

二度と来ないよと声には出さずつぶやいてドアを押した。

外に出ると高台の街路には強い北風が吹きつけていた。横断歩道を渡ろうと上着の襟をかき合わせて歩き出したとき、道の向こう側に人影が見えた。男女の二人連れだった。女のほうは小柄な体つきで丈の長い黒のコートを着ていた。男はジーンズ姿でカーキ色のフライトジャケットを羽織っている。服装は若作りだったが頭髪や顎に生やした髭は真っ白で明らかにかなりの老人だった。喫茶店の客なのか二人は横断歩道を渡ってこちらのほうにやってきた。ちょう

ど道路の真ん中ですれ違った。

ふと女性の顔を見て私はもう一度「えっ」と、今度は胸の裡で叫んだ。驚いたことにその女性はさっきまで谷間の家で話していた「西塔」の母親だった。街灯の暗い光の下とはいえ大ベテランの私が見逃すはずがなかった。茶髪のカツラを被りしっかり化粧して一見別人に見えたが、顔の造りは同じで右耳の下に苺の形をした痣が確かにあった。彼女はこちらに顔を向けたが見事なほど平然と私のことを黙殺して通り過ぎた。少し歩いてからふり返ってみると、思ったとおり二人は「純喫茶白鳥」に入った。

混乱する頭のなかを整理できないまま、わずかに残った上り坂をとぼとぼと歩いた。冷たい風に吹かれたせいか再び膝の痛みが戻ってきた。しかし、ダンスの効能がまだ持続しているのか、歩けないというほどではなかった。すぐに平坦な道になり照明に照らされたドラッグストアの黄色い看板が見えた。駐車場に戻って車に乗ると店の出入り口に従業員と覚しき男が立ちつくしていた。手をかざしてこちらのほうを見つめていたが、にらみつけられるのはもう慣れていたから平気な顔で車をスタートさせた。線路沿いの坂道を下って商店街の通りに入ったところでようやく一息ついた。

車を走らせながら最初に考えたのは、やはり「西塔」の母親のことだった。私の勘はまるで当てにならなかったようだ。「クソババア」と汚い言葉が頭に浮かんだが、なぜか腹は立たなかった。肩を並べて歩く男の腕が彼女の腰に回されていたから二人がただの知り合いだとは思えない。男が彼女のいう「お父さんの古い知り合い」だとしたら、身の上話を真剣に聞いた私はとんだ三枚目だった。すっかり騙されたわけだが憤る気持ちはなく、むしろ騙された自分が滑稽に思えた。あのカップルがダンスグループのメンバーなのかどうかは分からない。それでも私は彼女の長いコートの下にきらびやかなドレスが隠されていることを疑わなかった。貸切席のシートは確かに六席分あった。男がジーンズ姿だったから二人でマンボでも踊るのだろう。

まだ宵の口にもならぬ時間だったが商店の多くはすでにシャッターを下ろしており、代わりにスナックや居酒屋などの飲食店が看板に灯をともして営業をはじめていた。カラオケの歌声が大音量で街路に流れ、酔客が通りのあちらこちらを徘徊する様子は活気があり、日中の閑散とした商店街より賑やかな感じがした。

突然車道に飛び出してくる人影を怖れてゆっくりと走った。その間も「西塔」の母親のことばかりを思った。人はどんなことをしても生きていかなければならない。そして、生存の条件が厳しければ、生きていくための選択肢を普通は採らない方向に広げざるを得ない。もちろん、ある道を

チョイスするためには多少の才能と相手側のニーズが必要だ。彼女は能力とチャンスの両方に恵まれていたのだろう。色恋沙汰に定年制は適用されないから、彼女の生き方について異議を申し立てる権利は私にはなかった。

ただ一つだけ困ったのは「報告書」のことだ。しっぽりとした雰囲気で夜道を歩く二人の姿を見た今になってみれば、谷間の家で彼女が語った身の上話のすべてに信憑性の点で重大な疑義があった。最初彼女から話を聞いたとき、私はちょっとした悲劇のストーリーを思い描いていた。「息子は突然失踪して現在に至るまで行方不明。取り残された母親は週三日のパート仕事でかろうじて生計を立てている」そう結論づけることで彼女を「回収業務」の埒外に置くつもりでいたのだ。しかし、真実はそうではない可能性があった。過去の経験では債権者の目を欺くためにことさら貧しさを偽装する家庭はザラにあった。週三日のパートが曲者だった。そこには何か私が知らない別のオプションが含まれているのかも知れない。

疑いを拭い去ることはできなかったが、私は強いて彼女の言葉を信じようとした。少なくとも彼女は一人の母親として息子の安否だけは本気で案じていた。話の最後のところが少しだけ違っているに過ぎないのだ。「報告書」には決まり事と文法がある。「息子は行方不明、母親は男をつくってダンスを楽しんでいます」などというふざけた「報告書」を債権者側の担当者が喜ぶはずがない。不良債権は速やかに処理する必要があるのだ。そのためにはここはどうしても母親に悲劇のヒロインを演じて貰うしかなかった。そもそも彼女には生きて人生を楽しむ権利がある。騙された調査員としてはやや不本意なところはあったが、彼女の権利を尊重するのが健全な判断というものだろう。私は当初考えたとおりの「報告書」を書くつもりになっていた。

ふと思った。彼女も胸毛の老人も、どちらもこの私を凄い目でにらみつけた。二人の目に込められていた気持ちはきっと同じものだったに違いない。「西塔」の母親は一人の女として立派に生きており、他人に同情などされたくなかったのだ。そして、胸毛の老人は対等の男として私に立ち向かおうとした。上手な言葉で言えそうもなかったが、二人の目はおそらく生きていく意志とでもいうべきものを伝えていたのだろう。

どうやら大きな勘違いをしていたらしい。最初訪れたとき私はこの不景気な町とそこに住む老人たちを憐れみどこか見下していた。しかし、本当のところは彼らのほうが役者がずっと上手で、残された時間をしたたかに生きる術を心得ていた。「純喫茶白鳥」は元気な生活者たちが集まる貴重なスペースとして今も現役で存在しているのだ。憐れむべきはむしろ病気に打ちのめされて後ろ向きに生きている私だった。

老人たちに翻弄された午後をふり返りながら走っているうちに、前方に錆びついたアーチが見えてきた。ちょうどいいタイミングで信号が青になった。なぜか浮かんだワルツの一節を口ずさみながらハンドルを切って国道の車線に乗った。疲れてはいたが家に帰る元気だけは貰えたような気がした。

冴場　渉

さえば　わたる

1948　大阪府守口市生まれ
70　早稲田大学政経学部を卒業
91　サラリーマン生活を経てコンビニエンスストア自営
2000　コンビニ店廃業、現在調査会社契約社員
03　「コバルトアワー」で千葉日報「千葉文学賞」受賞
08　「文芸思潮」20号に「甲虫の家」を発表
09　「文芸思潮」26号に「決別の川」（原題「哀愁のティラノ」）を発表
11　「骨肉の町」で第7回銀華文学賞優秀賞受賞
12　「転ぶ女」で第8回銀華文学賞当選

受賞の言葉

冴場　渉

前回、前々回とありがたい賞を頂戴しました。もうこれで打ち止めだろうと思っていたところ、今回は「文芸思潮」にとって大切な賞である「河林満賞」を頂くことになりました。文学賞は何度貰っても嬉しいものですが、三度も続けて頂くと少々申し訳ない気持ちになります。

最初に入院したとき、医者から五年間生きることは難しいと宣告されました。定期検査の度に、次は肺だ、肝臓だと念入りに体を検（あらた）められますが、医者の期待に反してもう七年間も厚かましく生きてしまいました。最近はどうにも死ぬ気がしないような状態で、むしろひどく困惑しております。

どうやらあちらの世界では私のことをまだ修行の足りないダメな人間と判断しているらしく、当分は楽にして貰えそうもありません。おそらくもう少しまともな小説を書けと言われているのでしょう。病気をしてからそのことをさらに強く感じております。小説を書いているのではなく、書かされているのだと思います。私にとって創作活動は決して楽しい作業ではなく、厳しく辛い現世での修行です。楽にさせて貰えない以上、この道でがんばるしかありません。

ゴールの見えない道を歩き続ける上で、文学賞は確かに一つの道しるべになります。この度「文芸思潮」にとって大切な賞を頂き、本当にありがとうございました。心から皆様に感謝申し上げます。

歴史小説賞優秀賞

弧月

飛葉哲朗

一

その川はいったん北上して大きく半円を描きながら岩国山と横山を二分し、再び南東に進路を取って瀬戸内海へ豊かな水量を注いだ。横山の南から延びる尾根筋の先端から一望すれば、その巨大な川へ纏わりつくように、細い橋が見える。だが、決して貧弱なものではない。近付いてみると、洪水にも耐えられそうな石造りの橋脚が川面から聳え立ち、山なりの形をした木造橋を支えていた。

藩主と重臣たちの住む屋敷が集まる町に、南を除いた三方へ川幅二町（およそ二百メートル）もある錦川が横たわり、城下を東西に二分していた。しかも、度々氾濫を起こして橋を何度も破壊した過去を持つ。そのため、洪水で流されない橋の建設は藩の悲願だった。延宝二年（一六七四）改良を重ねた結果、ようやく五連のアーチ橋の錦帯橋が誕生した。その後、二百年間流失することなく景観の良いこの橋は、今の姿を保っている。

長さもさることながら、勾配のきつい五つの起伏を越えなければならないので、錦帯橋を渡るには時間が掛かる。橋を利用できるのは、武士と限られた商人だけなので、今の時間は人通りもない。水口宗一郎は橋を渡り、城下町錦見の東へ延びる大名小路を右手に見ながら、帰り道の土手沿いを重い足取りで歩いた。

土手沿いの桜の花は既に散り、それ以外の樹木は青々とした枝葉を柔らかい風にたなびかせて、春を謳歌している。本来なら、華やいだ気分で風景を愛でるところだ。だが、

藩命を受けたからには、季節の移り変わりにうつつを抜かしている暇はない。

兄監物の使いが朝方に来て、屋敷へ顔を出すよう宗一郎は促された。そして、使いの者を供に、兄の屋敷へ急いで向かった。彼は御手廻頭の重職にあるので、たとえ兄弟であろうと甘えた素振りを見せる訳にはいかない。また、宗一郎が運営する柔術道場の庇護者でもあるのだから尚更だ。

宗一郎の今があるのは、亡き父と兄監物の助力によるところが多い。本来なら、次男の彼は養子の口を待たなければならなかったが、僅か六万石の支藩に多くの藩士は必要ない。そのため、大抵の次三男は厄介叔父として一生冷遇される。その点、宗一郎は柔術の道場主の地位を確保できたのだから僥倖といわなければならない。勿論、柔術の腕前もそれなりにあると自負している。

今回は、その腕を乞われての用事で、依頼内容は仕官希望者の試合相手をすることだ。だが、宗一郎ではなく、弟子の新八を名指しして来た。

新八……二年前亡くなった親友不破兵庫の息子で陽真流柔術宗家の正統継承者だ。一応、道場の助教で主の宗一郎の右腕としての地位にある。そして柔術の腕前も道場一だ。

――儂（わし）でも敵わぬ。

新八の性格は温和で、父親同様に欲がなく宗家の立場を鼻にかけることはない。この親子は常に旅をしながら柔術の研鑽を積み、死生の境をさまよったのだろう。道すがら、追い剥ぎや盗賊に遭遇したり、命懸けの試合をしたりと胆力を練った節がある。治安の行き届いた藩内で過ごした宗一郎とは覚悟が違う。

その点を考慮して、兄監物は試合の相手に新八を指名したと思われる。宗一郎としては複雑な気持ちだ。試合の勝敗の帰趨は確かにわからない。だが、兄監物は確実に仕官希望者を退ける方法を選んだ。道場主の宗一郎が試合をして、仮に負ければ兄監物の立場は悪くなり、小藩といえども反対派に足元を掬われる恐れがあった。そうなると道場も畳むしかない。

――それなら弟子の新八が試合をすればどうか？

彼は宗一郎の弟子であるから、たとえ負けたとしても道場の名に一時だけ傷つくだけで済む。新八が宗家正統継承者であることを知る者は限られている上に、浪人の身の上だから言い訳には窮しない。

しかも、仕官希望者は体捨流の使い手だ。素手の者を相手にして、木刀を振るって勝ったところで「あたりまえだ」と世間は見る。その辺は仕官希望者も試合に難色を示した。そこで、新八も得物を持って試合に臨むよう指示が出た。陽真流柔術は小太刀や木刀も使って稽古を行うので問題はない、と兄監物は持論を述べた。だが、その裏を返せば、慣れない得物を使っての試合だから負けても当然だと言い

訳をするだろう。そうなれば、仕官希望者が勝ったとしても後味の悪い試合になり、仕官を辞退する可能性がある。策略家の兄監物の腹黒さを知りつつも、その命令に宗一郎は従わざるを得ない。

彼は憂鬱な気分で道場兼住まいの門を潜った。右手の道場から年少部の溌剌とした掛け声が聞こえて来る。稽古の様子を入口に立って見ていると、指導の若者が一旦手を止めて、子供たちと共に挨拶を寄越した。

宗一郎は新八の姿が見えないことを知ると、

「新八は、まだ戻っておらぬか？」

「はい……」

元服して間もない若者は、少年のあどけなさを残した顔をやや緊張させて答えた。年少の指導を任せられて日が浅いため、至らないところを指摘されるのではないか？　と思ったのだろう。

「新八が戻ったら、儂の処へ来るよう伝えてくれ」

「かしこまりました」

宗一郎は母屋へ向かう途中、西国街道を隔てた山野を眺めた。

――毎日続くものよ。

新八は、まだ夜が明けきらないうちに山中へ籠って一人稽古を毎日行う。父親の兵庫が課したものだ。それは、宗家だけに伝わる陽真流柔術の裏技で、宗一郎も知らない。

彼が学んだのは表技だけで、裏技は人の会得できる範疇を超えていると聞く。兵庫の話と、新八が放つ技の端に、それは時々垣間見えて背中に薄ら寒さを感じさせる。

簡単な技を一つ取っても、知っていることと体得していることでは大きな差がある。試合や実戦でそれを自在に繰り出せなければ意味がない。勿論、そのために稽古を積むのだが、やはり歴然と個人差が出て来るのは否めない。持って生まれた資質が到達する階（きざはし）の限界を決めてしまうのだ。

その点、新八は恵まれていた。幼少の頃より大人を相手にして互角に渡り合うのだから、柔術の強さは並ではない。稽古の際、先を諳んじているように技を繰り出し、陽真流の口伝「柔の中に剛があり剛の中に柔がある」の基本を身体に叩きこんだ動きは天稟を備えているとしか思いようがなかった。今は、道場の二人の高弟を相手に、同時に試合をしても凌ぐほどだ。

宗一郎はとうてい新八の足元にも及ばないと回顧していたら、当の本人が戻って来た。

「ただいま戻りました」

中肉中背で母親譲りの整った顔立ちが浅黒く日焼けした新八は、障子を開け放した中庭から挨拶を寄越した。

「おかえり。立ち話も何だから近くへ寄りなさい」

「はい……それでは失礼します」

新八は廊下で正座して一礼すると、部屋へ入った。父親に礼節を叩きこまれた所作だ。

「今朝、兄上に呼ばれて行ったところ、おまえに他流試合を致せとのことだ。相手は仕官希望者で体捨流を使う」

「承知いたしました」

新八は相変わらず逡巡のない返答をした。

「試合方法だが、こちらも得物を使うべしとのこと。これは、同じ条件で公平な立ち合いにしたい相手の望みだが、何か考えはあるか？」

「それなら、小太刀を使いましょう」

「勝算のほどは？」

「相手を見ていないのでお答えできかねますが、無手を主体とする武技としては妥当な選択かと……」

宗一郎は沈思した。確かに犯罪者追討のため陽真流は藩士や小者に捕縛術を教え、その際、刀を持てない者には小太刀を扱わせている。それに小太刀を使わせたら、とうぜん新八の右に出る者はいない。

「そう言えば……昔、流祖が体捨流の者と試合をして陽真流『奥儀』で退けた、と兵庫に聞いたことがある」

「それは私も聞き及んでおります。また、父も一度は使ったそうですが、至らなかったとも……」

「陽真流の奥儀だから、さもあろう。それが使えれば、兵庫は道統を継げたのだろう。それで、おまえは会得できたのか？」

「未だに会得していません。何分『空斬の太刀』は雲を掴むような技ですから、どうすればいいのかさえわかりません」

『空斬の太刀』……陽真流抜刀術の奥儀で、これと組み打ち術の『獅子乱舞』を会得すれば新八は道統の継承を許される。彼が奥儀を会得できたら道統を継承させる立会人に、宗一郎は兵庫から頼まれている。

「何か、きっかけになるようなことを言っていなかったか？」

「蓮の花開く音を断て、と口伝を残して一日千回の抜き稽古を怠るなと……」

「それだけか。兵庫の話によると、我らの師匠三左衛門様におまえは目通りして、奥儀を会得すれば道統の継承を許すそうだったな」

「はい。……ですが、中々思うようには参りませぬ」

新八は頭を掻きながら苦笑いを浮かべた。彼が稽古を怠っていないことは、身体中の痣や擦り傷を見て宗一郎にはわかっていた。まだ、夜が明けきらない山中の道なき場所を走り、崖を登って飛び降りるのだから、獣と何ら変わりはない。そのような鍛錬をするのは、陽真流流祖が忍びだった証しだ。

流祖不破四郎は戦国末期の甲賀忍びで、後に幕府隠密に

なった。縁あって明人の陳元贇（ちんげんぴん）に少林寺拳法の教導を受け、彼と共に陽真流柔術を創始した。なぜ、陳が不破四郎に入れ込んだのかは理由があり、一介の忍びが表舞台へ出られた要因も絡んでいた。本来、忍びは情報収集や暗殺を生業として厳しい掟に縛られる非人間的な集団で、その世界から抜けることは出来ない。そういった忍びの掟を、陳は熟知していた。なぜなら、彼自身も明の忍びだったからだ。明王朝は文禄元年（一五九二）、豊臣秀吉が朝鮮出兵しており朝鮮側に加担し、自国の財政を逼迫させて経済の悪化を招いた。それに連動して各地で内乱が勃発し、政権の土台が崩壊寸前だった。秀吉の死で侵攻は一頓挫したが、次の覇者である徳川政権と日本の内情を知る必要に明は迫られて、探索に長けた人物を送ることになった。

派遣されたのが少林寺武術を使い、芸能に秀でている陳元贇だ。彼は、自分の持つ技芸を日本の文化人に披露した。戦国時代も終焉を遂げて文化と芸能に飢えていた日本人にとっても絶好の時期と重なり、晩年の彼は、初代尾張藩主徳川義直の知遇を受けるまでに至った。

徳川義直は、新陰流兵法四世の導統を柳生兵庫助から授かるほど武技に堪能で、陳元贇の芸に傾倒してもおかしくはない。義直は徳川御三家の一人だ。日本政権の中枢にいて、政治に関しての発言力も大きい。陳が義直に口上して、朝鮮と明王朝に対し友好的措置を取るよう願い、秀吉の朝鮮出兵と同じ轍を踏むのを避けさせたと思われる。日本政権を裏で操るというのは忍びとしては最高の仕事で、しかも、弟子の四郎を幕府隠密から保護するという芸当までしてのけた。

幕府隠密の命令を受けた不破四郎の使命は陳元贇の正体を探ることだ。だが、彼は正々堂々と政府高官と交誼を結んで怪しい素振り一つ見せない。交誼で得た所見を、陳は四郎の意見と照らし合わせて確実なものにしていたのだ。彼は自分も知らないうちに助力したことになる。その行為は、騙されたとはいえ、幕府隠密から見れば裏切りに等しい。忍びの掟の非情さを熟知している陳は、四郎に刺客が放たれる危険を察した。それを避けるためには、彼を忍びの世界から無縁にしなければならなかった。

陳は師弟で創案した武術を陽真流と命名して、不破四郎に一派を立てさせた。そして、後ろ盾に徳川義直になって貰うことで、幕府隠密の手から四郎を救ったのである。

二

新八と仕官希望者井上左馬之助の試合は一週間後と決まり、場所は御用所家老の香川屋敷で行われる。そもそも、彼が本藩の意向を受けてこの試合を組んだのだ。井上は長州藩奥番頭の推薦状を持参して来たので、無下に断れなかった経緯がある。支藩の岩国藩を預かる藩主吉川経幹（きっかわつねまき）も、

本藩の長州藩に恭順の呈を取っている以上、形だけの試合だけでも行わなければならないのが現状だ。

長州藩と岩国藩の関係は微妙な関係で成り立っていた。

戦国時代に終止符を打った徳川家は、政権を磐石のものにするため諸大名の鉢植え政策を行って親藩、譜代大名（自己の一門や家臣らで成る）を政局の中心に置き、外様大名（旧族・豊臣系・関が原の戦い以降隷属した）などを辺境へ追いやった。長州藩の毛利家は関が原の戦いのおり西軍に加担したため、中国八カ国の領土を長門・周防二国に削減されてしまう。

吉川広家は戦いの時東軍に協力して家康の信任も厚く、宗家の毛利家を存続するため奔走し長州藩を改易から救った。その功績を認められ吉川は、毛利輝元から領土のうち周防二万石をもらい受けて岩国へと移った。だが、宗家に背いて東軍に参加した行為は、長州藩士たちから白い目で見られる罪科を背負わねばならなかった。

時代が下り、岩国藩主吉川経幹は疎遠であった宗家との溝を協調と融和によって埋め、文久二年（一八六二）には宗家毛利敬親（たかちか）の名代として上京するまでに関係を回復させた。

世相は、黒船の来航によって国際的に開国を迫られ、幕府大老井伊直弼が単独で日米通商条約を結ぶ変革期の前兆を表している。開国に反対する者は徹底的に弾圧された。その行動を良く思わない尊王攘夷派は大老の暗殺を決行する（桜田門外の変）。この事件をきっかけに、幕府は公武合体の政治へ移行して行く。

長州藩では吉田松陰が海外事情を実地に見極める必要性を説き、久坂玄瑞や高杉晋作など、将来尊王攘夷運動の中心になる人物を輩出した。その松陰は、幕府が勅許を得ないまま日米通商条約を結んだことに反感を強めて老中暗殺計画を立てたが、未然に漏れて処刑される。そして藩は親幕派と反幕派の間で政権争いが始まり、岩国藩でも長州藩と幕府の間に挟まれざるを得ない立場へ追い込まれる。

今、水口の陽真流柔術道場は時勢の風が吹く前の静けさで、去年、大老井伊直弼が桜田門で暗殺されたという風評が届いたばかりだ。それを聞いた宗一郎は、兵庫の漏らした「武士の時代は、そろそろ終わる……」が脳裏へこびり付くのを感じた。

――だが、今は世相のことを考えている時ではない。一週間後に控えている試合を念頭に置かなければならない。

宗一郎は、道場の上座で新八の帰りを待った。

新八は昼を過ぎても、日課の山籠りから戻ってこなかった。道場の覗き窓に集まった娘たちも彼が居ないと知るや即座に姿を消した。昔、巽芸者で名を馳せた母親の美貌を新八は受け継いでおり、軽輩や町屋の娘たちに人気があっ

た。だが、色恋の気はない。

そんな美女の誉れのある新八の母と厳つい兵庫がどのような経緯で知り合ったかはわからない。その頃、彼は陽真流奥儀を試みたと述懐したことがある。だが、技は不完全で道統の継承は無理だと悟り、息子の新八へ託した。

男前で腕の立つ新八が居ないのに、一人の若い娘が道場の覗き窓から稽古を眺めていた。年の頃は、まだ童女の域を脱しきっていない十四、五歳位だろうか？　他の娘たちのように異性を憧憬の眼差しで見てはいない。その細面にある上がり目は挑むような光を宿し、引き結んだ口は意志の強さが表れている。

――柔術に興味があるのか？

武技を習いたい女が、稀に居る。そんな類かと宗一郎は思ったが、町屋の娘でない雰囲気は、張りつめた糸のような武家育ちを思わせた。そのような娘なら護身用に柔術を習ったとしてもおかしくはない。しかも、陽真流は関節技が多く、非力な婦女子にとっても学びやすい武技だ。

――話をしてみるか。

宗一郎はおもむろに立ち上がって外へ向かった。道場は道に面していて、通りを歩く者から稽古が見られるように建っていた。誰でも気軽に入門できるように、宗一郎が配慮した構造だ。だから、門弟は武士もいれば町人もいる。武士といっても軽輩の子弟がほとんどだから、身分差の軋轢はない。それに最近の世相は財力のある者が幅を利かせているので、商人に金を借りている手前、武士といえども頭が上がらない場合もある。

――どちらにしても、娘の身分を尋ねるのが先だ。

宗一郎は一生懸命背を伸ばして稽古を眺めている娘に声を掛けた。

「柔術に興味があるのかね？」

娘は不意に声を掛けられて驚き、見開いた目をこちらへ向けた。

「す……すみませぬ。勝手に覗いたり致しまして」

「構わないよ。どうせ、往来から見学出来るようにしているからね。あまり見かけない顔だが、そなたは武士の娘かね？」

宗一郎の問いに娘は口をつぐんだ。答えたくない様子がありありと見えた。

「わけあってお答えできませぬ。平にご容赦くださいませ」

娘は深々と頭を下げると、踵を返して即座に立ち去った。その挙措と物怖じしない態度は武家の躾が見受けられた。

――中々、肝の据わった娘だ。

宗一郎はしばらくの間、娘を見送った。

それから半刻後、新八は帰って来た。その凄愴な姿を見て道場の誰もが驚き、宗一郎は心配した。

「どうした……何かあったのか？」

「崖から落ちて暫く気絶していました……ご心配かけて申し訳ございません」

「そんなことはよい。怪我の手当てが先だ」

「怪我は大したことはありません。それより『獅子乱舞』の工夫がつきましたので、試してよろしいですか？」

「それは誠か？」

新八は頷いた。宗一郎は直ぐに覗き窓を閉じさせて新八の指示する高弟たち六人を選抜し、銘々に木刀や小太刀を持たせた。万が一のことを考えて、彼らに胴へ防具を付けさせる。

『獅子乱舞』……多勢に無勢の場合に使う技だが、その存在を宗一郎は疑っている。二人と同時に遣り合うなら、背後を取らせず、相手が横並びしないよう回り込めば活路は開ける。もし、三人以上の敵を相手にするのなら遮蔽物のある地の利を利用して姿を隠し、一人ずつ片づけて行くしかない。それこそ、元忍びの流祖が得意とした術で、何らかの関係があるように思えた。

だが、周囲を取り囲まれて、その中心に置かれた新八に姑息な隠遁術などは使えない。しかも選ばれた高弟たちはいずれも剣術の達者で、中には神道無念流の目録を持つ者もいる。彼らは同士打ちを避けるため一気に仕掛ける愚行はしない。恐らく、新八の隙を衝く筈だ。そういった試合の駆け引きに慣れている六人を相手にして勝つのは不可能だ。

新八は準備が整うと腰を落とした。彼の両手が腹部の前で交差して獣が顎を開いた形になった。今まで見たこともない構えだ。六人の高弟たちは新八に対して一間（約一・八二メートル）の間合いを保持したのも束の間、さらに後ずさりした。いずれも恐怖におののいた顔つきだ。宗一郎も新八の放つ間合いの結界に、抜き身の真剣を喉元へ突き付けられた気配を感じ取った。

――な、何だこれは……まるで殺し合いの雰囲気ではないか？　止、止めなければ……

だが、宗一郎の身体は金縛りに遭ったように動かず、制止の掛け声さえ出ない。鳥肌が立ち、下肢におぞましいものが這い上がって来る。六人の高弟たちも同じ筈だ。中には身体を震わせている者さえいる。

新八の殺意にも似た波動を跳ね返すように、その正面の偉丈夫な弟子が木刀の剣先をゆっくりと上げて行く。彼は道場の中でも剣の腕は立ち、新八の背後に居る小太りの男に目配せをした。それを察した男は、日ごろの愛嬌のある顔を捨てて刺突の構えを見せ、その目は体躯とは逆に細くなった。薄暗い道場に冷たい殺意の眼光が浮沈した。

新八のはりつめた神経が限界に達したのか、一瞬にして間合いの結界が消えた。それを好機と悟った背後の男が動

いた。小太りの男の突きが、新八の背中へ刺さる光景を宗一郎は見た。

瞬間、彼は自分の目を疑った。

うねる波のように動く男たちの間に、新八が舞うように浮沈している。彼に翻弄されながら、六人の高弟たちは次々と倒れて行く。時々、防具の胴を叩く音や何かが落ちて床へ響く音、さらに悲鳴も聞こえた。

一瞬の夢魔がよぎった後に、新八は一人で佇んでいた。その周りの床へ六人の高弟たちが倒れ伏し、呻き声を漏らす者さえいる。

――い、一体……何が起こった？

宗一郎は我に帰ると、直ぐに傍観している弟子たちを促して怪我人の介抱を行った。幸いにして命にかかわる重症者はいない。新八は介護の手を借りて上座の畳で横になった。

「幸平、皆の怪我の具合は？」

宗一郎は、蘭方医の息子に問い質した。

「肋骨にひびの入っている者が二名、手首の脱臼と思われるのが一名……あとは酷い打撲傷で、命に関わることはありません」

「そうか……脱臼した者は儂が診るから、肋骨のいかれた者をさらしで固定しろ。誰か、母屋へ行って酢と小麦粉を貰ってまいれ」

宗一郎はてきぱきと指示して脱臼した者の治療へ取りかかった。

「一体何が起こったのだ？」

宗一郎は脱臼を負った若い弟子に尋ねた。

「そ、それが……よくわかりません。小太刀が不破殿の脾腹へ刺さったと思った瞬間、手首を捕られたみたいで……」

手首の痛みに顔をしかめて彼は言った。

「私も新八殿の背中へ木刀が埋まるのを見ましたが、手ごたえが全くありませんでした」

新八の背後から一番に襲った弟子が、首の後ろを揉みながら同じ意見を述べた。それを宗一郎は見ている。その時、兵庫の述懐を思い出した。

「陽真流柔術奥儀『獅子乱舞』は、時の存在を置き換えて残像を使う技だ。恐らく『気の先』の深みまで会得すれば、相手の心象風景に影響を与えて操り、虚を衝けるのだろう。忍びが人外化生と呼ばれたように、奥儀を会得した者も同じ類いだと儂は思う」

敵を攻める機会がある。その虚を衝けば効果は大だ。そして行動を起こしたなら『先』を取ることは必要で、形として『対の先』・『後の先』・『先の先』がどの武術にも存在する。敵の動きを予知して、その技が功を奏す前に勝ちを得る『対の先』。敵の技をかわして体の崩しを誘い、その

虚を衝く『後の先』。敵が技を放つ前の機先を制する『先の先』などだ。そして、もう一つ……精神的な機先を制する『気の先』というものがある。これは相手の心のありようがわかるから動きを一歩先んずればいいのだが、これが一番難しく、兵庫のいう化生の成せる業だ。

確かに、高弟たちから聞き取った内容からすれば、新八の動きは人のものではない。どちらかといえば、高僧や山伏が修行して会得する呪術と思われる。山伏が修行で会得する、『射竦みの術』というのがある。相手を金縛りにする術だ。先ほど、宗一郎も経験した。これと、相手の心象風景に残像を映す手法を使えば、六人同時に相手をしても活路が開けるかも知れない。

――『気の先』は心のありようを自在に扱う……すなわち精神力で相手の気勢を削ぐことで相手を制する。つきつめれば、それは催眠術にすぎない。陽真流宗家はこれを達者に扱う流派ではないのか？

宗一郎は自分の推測に怖気を感じた。

「師匠。どうやら私は短刀捕りで投げられたようです」

手首の治療を受けている弟子が、痛みをこらえながら告白した。

「多分、俺は首投げを食らったのだろう。首の後ろに当て身の痛みがある」

新八の真後ろで突きを放った小太りの男が述懐すると、彼に目配せした大兵は、

「その投げられた五介をぶつけられ、私は打ち込みの機会を逸しました。そして、首筋の急所へ当て身を入れられたのでしょう……」

「私は、隅投げの類いで投げられたのだと思います。新さんを掴んだと思った瞬間、目の前がひっくり返り、背中と脾腹に激痛が走りました」

新八の相手をした者たちはいずれも高弟だけあって、どんな技を仕掛けられたか推測できたようだ。だが、いずれも虚像を掴まされて新八の実体を見抜いた者はいない。

当の新八は上座の畳の上で大の字になっている。

「新八の様子はどうだ？」

「大きな怪我はありません。試合の打撃も受けていないようで……疲れたのか、眠っておられます」

介護をした弟子の話を聞いて、宗一郎は呆れた。

――試合後は心身が興奮して眠るどころではない筈……全く恐ろしい男だ。

三

その夜、宗一郎は目を覚ました新八と厨の囲炉裏で向き合った。彼は遅い夕食を摂っている。

「これで、おまえは父親の兵庫を超えたな」

「まだ『空斬の太刀』が残っております」

「工夫はつかぬか？」
「はっきりとは申せませんが、先の試合で技の端が掴めたような気がします」
「それは僥倖……やはり、兵庫が申したように化生の範疇か？」
「多分……『木や石に目があるように大気にも目がある。大気は身体の気脈に通じて、心象風景に映った残像がしたことは具現化する』という口伝は、技の道しるべではなく暗示でしょう。それに捉われた虚を衝いて、心象風景の中で相手を断つのが『空斬の太刀』だと思われます」
「そんなことが出来るのか？」
「流祖が、尾張で御前試合をした語り草が事実なら可能なのでしょう」
宗一郎は沈思した。
昔、流祖不破四郎は尾張初代藩主徳川義直の面前で試合を行い、相手を『空斬の太刀』で倒した。その褒美として藩主から刀を下賜され、これを代々宗家が不破の名と共に継承している。現在、刀は宗一郎が兵庫より預かって、新八が奥儀を会得すれば渡す予定だ。
義直は新陰流四世を継承したほど武芸にも堪能だから、刀を流祖に下賜したとなれば『空斬の太刀』の信憑性は疑いようもない。しかも、新陰流の道統を継ぐには『無刀取り』の会得が必要不可欠だ。これは刀を持つ相手と素手で渡り合って制するのだから、陽真流柔術と似通っている。
そもそも新陰流は剣禅一如を教義にして禅とは深い関係にある。禅の始祖は達磨で少林寺へ滞在していた。後年、流祖の師陳元贅は、そこで禅と拳法を学んだ。彼と義直は武技の共通性を見出したのだろう。だからこそ、義直は陳を日本に帰化させて召し抱えた。そして、その弟子不破四郎の『空斬の太刀』に感銘を受けて刀を褒美として与えたのだから、語り草の辻褄は合う。
時代も徳川家が天下を取ったとはいえ、まだ戦国の殺伐とした気風が色濃く残っている世相だ。武芸で名を馳せるには死の覚悟が要る。今の平穏な世相では、それを頭で理解しても体感できない。その点、兵庫は平穏な時代の申し子で優し過ぎた。人殺しの罪業を背負う覚悟がなかったのだ。
「俺は、しょせん百姓の子せがれだ。人を殺すことは出来ないよ……」
兵庫の述懐が思い出される。彼は宗家不破三左衛門の実子ではなく養子だった。
——儂も、兵庫と同じかも知れぬ。
宗一郎は道場主の地位に甘んじて兄の顔色を窺い、保身に身を砕いている。もし、自分が試合をしなければならなかったら、回避する方法を一生懸命考えただろう。武士の子であっても、所詮死ぬ覚悟もなければ、人を殺すことも

出来ない。
新八が放った気の結界は、人殺しの罪業を背負う覚悟の表れで、まさに夜叉だ。兵庫の気の結界は死の覚悟はあっても夜叉になりきれない迷いがあり、奥儀を会得するまでには至らなかったのではないか？　息子の新八は、それを凌駕した。彼の天稟を見抜いたからこそ、宗家不破三左衛門は継承を許したのだ。
宗一郎は、改めて一派の道統を継承することの重さを感じた。
——もし、兵庫が言ったように武士の時代が終わるとすれば、世相は変革で乱れる。その時に必要なのは兵（つわもの）だ。
宗一郎は、父親や兄監物が不破家をなぜ優遇するか、薄々感づいていた。師匠の三左衛門や親友の兵庫は諸国を歩き回り、世間の情勢を幅広く知っている。その知識を欲しているのだ。特に、江戸と京都の政治情勢は重要で、藩の出先機関のものだけでは足りない。その点、兵庫などは浪人の身で藩士のように動きを束縛されないから、幅広い情報を入手できる。
しかも、幕府や他藩の秘事は忍びの技術を使って探ることも可能だ。特に、兵庫の探った大塩平八郎の乱は岩国藩にも衝撃をもたらした。
事件は天保八年（一八三七）二月一九日に起きた。飢饉にあえでいる民を無視し、奉行所と暴利を貪る商人が結託して江戸へ米を送ろうとしていることに、元大阪東町奉行所与力の大塩は腹を立てて騒ぎを起こした。注目すべき点は、武士である彼が真っ向から幕政を批判したところだ。しかも、奉行所与力といえば将軍家直属の役。そのような人物が反旗をひるがえしたのだから世間は驚いた。
徳川家康が江戸へ開府して以来、戦のない平和な時代が長く続き、その間に武士は腑抜けになった。その証拠に、大塩の騒ぎを止めるのに奉行所だけでは手に余り、隣の藩の協力を得て鎮めたという。その点を考えると、最近の世相は幕府の政策では対応しきれなくなってきている。
元々、大塩は民のことを思って騒ぎを起こした。その彼が市中を焼き払って何の罪咎もない大衆を路頭に迷わすわけがない。おそらく、煽動を得意とする第三者が騒ぎに便乗して市中を混乱に陥れたのだろう。その時、兵庫は現場にいて、彼らを目撃していた。
「その一団は訓練され、統率の行き届いた動きで今橋筋の商家へ付け火を行い、そこに雇われている用心棒たちを見事に倒していった。その上、大塩勢を止めようとする奉行所の手の者たちを背後から襲って、その指揮を削いだ手並みも実に鮮やかだ。あの混乱した戦場を、誰にも見咎められず自在に泳ぎ回っている男たちは、俺の想像が正しければ亡霊と化した忍びだ」
兵庫の述懐を宗一郎は思い出した。

――幕府は豪商から借りた大金を恐れていたのではないか？

大塩が決起することを知り、その騒ぎに乗じて金を返さずに、借用証文を合法的に葬る計画を幕府は立てた。証文は金と同じ。それが無いと、取り立てられないのが常識……『白紙に戻す』言葉があるように、強権の鉄槌を幕府は無造作に振り下ろした。だが、その行為は公にできないから、兵庫が亡霊と呼ぶこの世に存在しない第三者へ依頼した。

騒ぎの裏で暗躍した一団に兵庫は遭遇して、その頭と思われる人物から裏のからくりを聞き出した。それは、商人の台頭を良く思わない幕府が、大塩の騒動を利用して武士の総意の鉄槌を振り下ろしたということだ。元々、武士というものは血を血で洗ってきた職業。言うことを聞かない将軍の首をすげ替えるのも平気でやってのける人種なのだから、血を流して政権を保守することなど、幕府にとっては造作もない。

所詮幕府の政は武士中心のものにすぎない。商いは下賤がやるものと決めている以上、世相の流れを読むのは無理だ。せいぜい謀略を使って借金を水に流すことしか考えつかない。しかも、幕府高官が闇の組織を使って大塩の乱に乗じて、大手商人の握る、幕府や武士などが借りている金の証文を焼き払ってしまった、という話を誰も信じない。そんな証拠など一切ないのだから……

――だが大塩の乱、大老井伊直弼暗殺などは幕府の権威が脆弱になっている兆しではないか？

国を閉ざして二百年以上経つが、黒船の来航以来海外列強の圧力に、幕府は開国せざるを得ない立場に追い込まれた、と兵庫は見ていた。

そうなると変革の到来だ。小国の岩国藩が生き残るためには、時勢を読んで速やかに手段を講じなければならない。その情報収集を担うのが陽真流宗家の不破一族だ。宗一郎の父親は不破の能力をいち早く見抜き、彼らがこの地へ来るたび歓待した。不破も骨休めが出来る拠点として、ここを選んだ。こうして、水口家と不破一族の付き合いが始まった。

宗一郎が十歳の頃、師匠不破三左衛門は兵庫を連れて屋敷を訪れた。その時、宗一郎は木刀で素手の兵庫と試合をして、あっけなく負けた。それ以来彼は宗一郎の宿敵であり、親友となった。父親も自分が陽真流を学ぶことには快く承諾した。だが、これも父親の策略だったことを、後年、道場を開いて知った。ここに陽真流の看板を上げた道場がある限り、宗家の不破一族は疎かに出来ない。一緒不在の修行を続けるにしても、必ず立ち寄らなければならないからだ。

父親の真意を師匠不破三左衛門が見抜いていたかは定か

ではない。一派を存続させるためには、やはりそれなりの世渡り術が必要なのも確かだ。彼らは、お互いの利害が一致したからこそ手を結んだとも考えられた。現在、それを兄監物が継承して、新八を手駒に政界を泳いでいる。

四

試合の日が訪れた。

藩主の居館から南東に少し離れた所に香川屋敷がある。門番や中間の部屋のある長屋門は瓦葺きで、白漆喰塗の壁に下板見張りをあしらった重厚な構えだ。試合はここの庭で行われる予定で、新八は既に待機している。宗一郎は他の用事を済ませて、家老屋敷へ向かっていた。足早で屋敷へ近づくと、門前で人が佇んでいる人影を発見した。先日、道場の稽古を一生懸命見学していた娘だ。彼女は宗一郎を認めると会釈した。

「陽真流道場の主、水口様とお見受け致します。先だっては失礼の段、平にご容赦くださいませ。私、井上左馬之介の娘みつと申します」

緊張した面持ちで挨拶をする娘に宗一郎は訝しく思った。それも一瞬で、武士の躾が行き届いている態度には好感を抱いた。

「いかにも拙者は水口宗一郎でござる。そなたは、我が弟子不破新八と試合をする相手の娘であったのか……」

みつは重々しく頷きながら、思い詰めた表情で宗一郎を直視した。

「……して、儂に何用かな？」

「お願いの儀がございます。何卒、私を屋敷の中へ入れて下さいませ」

「な、なんと……試合を見たいと申すのか？」

「はい。不破様が空間を斬る技を持つお方なら、父上も尋常ならざる手合いと思い、死す覚悟で試合に臨んでおります」

「なぜ、そなたが空間を斬る技などと申されるのかな？」

宗一郎は驚愕しながらも、平静を保って尋ねた。

「父上が道場で昔の語り草を耳にしたそうです」

――なるほど……流祖の試合は相手の子子孫孫まで伝えられたのか。

「もし、今日が今生の別れならば、井上の子として最後を看取りとうございます」

みつは、その場に土下座した。

――何という健気な。

と感心する気持ちとは裏腹に、宗一郎の脳裏へ邪な策が浮かんだ。娘の姿を見れば井上の剣が鈍って隙が生じる。そこに付け入れば、新八は勝ちを拾うことが出来るのではないか？　という策だ。

――儂も、父上と兄上の同じ穴の狢（むじな）だな。

宗一郎は自嘲した。兵庫の横顔が脳裏へ浮かぶ。悔恨の皺に刻まれながらも、自分の生きざまに決して妥協を許さない意志の強さが窺われた。

――勝負に余計な斟酌（しんしゃく）は無用だったな。

宗一郎はため息をひとつ吐いて、

「気持ちはわからないでもない。だが、そなたの父上が試合を見ることを許していない限り、武士の子らしく武運を祈って待つが良かろう。儂も新八を信じておるからな」

宗一郎はみつを突き放すように、何事もなかった態度で屋敷の門を潜った。

半刻（一時間）後、新八は井上左馬之介と対峙した。その肩幅が広くて六尺（約一・八二メートル）もある大兵は見る者を圧倒させる磁気を孕み、小兵の新八をひと薙ぎで叩き伏せるかと思われた。だが、話し掛ける声は優しさがこもっていた。

「率爾（そつじ）ながらお尋ねする。貴殿は空間を斬る技を持つ不破殿の血筋であらされるか？」

「血族ではありませんが、不破と名乗るのは許されております」

「では、空間を斬る技も出来ると……？」

「未熟者ゆえ、そこまでは至ってはおりませぬ」

新八は頭を掻いた。二人の会話を遮るように、初老の審判は、

「双方ともよろしいかな？」

宗一郎は井上の駆け引きの上手さに臍を噛んだ。試合前の落ち着き払った態度は練れたもので、相手から手の内を探るのに狡知な手段もいとわないのが窺えた。新八も試合前の緊張感を忘れて、井上の問いに素直に答えてしまっている。これでは、試合の主導権を握られたようなものだ。

「はじめ！」

しわがれた審判の声が響いた。

八双の構えから新八を押しつぶそうと前に出ようとした井上は、刹那に後退りした。この前、道場で見せた新八の気の間合いに押されたのは歴然としていた。彼の殺気は、試合を観戦している誰をも恐怖に陥れた。井上は刀を守りの中段に構え直した。先ほどの余裕ある表情も吹き飛んでしまっている。

――井上は新八に神速雷撃の突きと蹴りがあることを肌で感じ取った。確かに、彼の手足は肉を抉り、骨を砕くから致命傷にはなる。

井上の鋭い勘に宗一郎は感嘆した。

だが、井上は歴戦の兵だった。新八の力量を計り知れないと読んだのか、人殺しをも厭わない、触れれば切れる気配を全身から漂わせた。家老の香川と兄監物もただならない試合の様相に身体を強張らせている。宗一郎自身、床几へ根が生えたように微動だに出来ない。

――こ、これは戦場だ。

宗一郎に体験はないが早鐘のように打つ心臓、背中から脳天へ向けて走る痺れた感覚、震える手足などは恐怖に駆られてこの場を直ぐにでも立ち去りたい欲求の表れだ。脱兎のようにこの場を逃げるか、踏み止まって死中に活を得るかの選択を迫られている。武人ならば選択肢はない。

新八は小太刀を逆手に腹部の前へ水平に構えている。陽真流柔術の『後の先』を特徴とする技だ。井上が木刀を振り下ろせば、新八の勝機は訪れる。だが、井上は簡単に誘われる器ではない。必ず虚を見出して打ち込む。

倦み疲れた方が負ける。

新八が、この前見せたように殺気を自在に操ることが出来れば、井上を先に打ち込ませられる。宗一郎は道場で見た『獅子乱舞』を回顧しながら、勝負の行方を見守った。

間合いは二間（約四メートル）。双方とも時が止まったように動かない。観戦している家老に監物、十名の下士たちも風景に縫い合わせられた木偶人形に等しかった。風でたゆむ枝の葉ずれの音さえ聞こえない。

その風が動いたのか、試合に変化が生じた。新八の周囲へつむじ風が吹き、砂埃を舞い上げた。それは、彼を中心にやがて螺旋状になって上に向かう。新八の袴がはためいた。

――ま、まさか……これは現実ではなく心象風景に映る出来事か？

宗一郎は眼を瞬かせたが、一向に収まらない。井上も驚愕している。もし、これが新八の語る虚実をない交ぜにした世界なら、彼は『空斬の太刀』を会得しているのではないか。そうなれば、次に罠が開かれる。

新八を加護していた間合いの結界が、螺旋状に吹く風と共に一瞬にして消えた。彼の気力の衰えと悟った井上が、爪先で土を噛んで動いた。間合いを詰めるごとに剣先が上がる。緩慢とした動作だ。

裂帛の気合と共に、井上の放つ渾身の一撃が煌めいた。新八の右肩が断たれた風景が宗一郎の目に映った。だが、次に見たのは、木刀を振り下ろした井上の右斜め前で、右足を少し浮かせて小太刀を顔の前に残心している新八だった。ここに至って現実の風景に戻ったことを宗一郎は悟った。同時に、新八が見事に残像を使う化生だと証明された。

井上の巨体が木刀の重みに耐えられない仕草でゆっくりと横倒しに沈んでいく。春たけなわの筈が、底冷えにも似た悪寒が宗一郎を襲った。試合は、観戦者すべてを白昼の夢魔へと陥れた。

新八が、正面の濡れ縁に端座している香川家老へ一礼した。瞬間、辛うじて夢魔から覚めた香川は、空気を貪り吸いながら質した。

「今……何をした？」
「小太刀で井上殿の木刀をいなし、蹴りを入れました」
「動きが見えなかった。技の名は？」
「弧月」
　それを補足するように宗一郎は説明した。
「陽真流柔術の基本形で『柔の中に剛があり、剛の中に柔がある』という理を極めた者の技で……恥ずかしながら、私には出来ぬものでございます」
「むぅ……」
「円弧の捌きで相手の攻撃を外し、弦である最短の間合いを当て身で制します」
「不破の相手をした者は体捨流皆伝の腕前と聞いておる。如何に小太刀とはいえ、死の覚悟がなければ木刀を持つ相手と対峙するのは難しいと思うが、その辺はどうなのだ？」
「おっしゃるとおり。体を捨てるが如く流儀に恥じぬ方で、新八も手加減は出来ませぬ。ただ今の勝負の均衡は、死に捉われるか否かで決まったものと思われます」
「……無欲なほど強いと言うことか」
「井上殿がこと切れています」
　重々しい審判の報告に一同はどよめいた。
　宗一郎は新八を見た。決死の試合をした後で顔は青白く、眉一つ動かさない無表情のままだ。
　――まさしく、人殺しの罪業を背負うことを厭わない夜叉だ。
　宗一郎は怖気を感じた。

五

　新八が試合をして一週間経った。彼は普段と変わらない様子で日々過ごしている。今は、山中に籠って一人稽古をしている。
　気になるのは、試合で亡くなった井上左馬之介の一人娘みつのことだ。天涯孤独の彼女は、現在家老屋敷へ身を寄せている。井上の試合ぶりは家老も一片の責任を感じたのか、みつの身の振り方を考慮すると申し出た。それを、彼女は一応受けた形だ。だが、同じ領内に、試合とはいえ父を殺した男が居るのに耐えられるかどうか。
　新八にしても、みつとの面識はないが、彼女に出会えば慙愧の念に捉われる可能性もある。
　――まさか、それがみつの本意か？　……いや、考え過ぎだ。まだ幼い容貌を残した娘に深慮はない。
　井上の葬儀に宗一郎は立ち合った。無論、新八には遠慮させた。その時、みつは武士の娘らしく、宗一郎へ丁寧な礼を述べた。必死に涙を見せまいとしている彼女は痛々しかった。あの時、屋敷へ入れてやれなかったことを、宗一郎は悔やんだ。そして早々にその場を立ち去り、過ぎたことは忘れようと自分に言い聞かせた。

　だが、忘れてはならない約束が宗一郎にはあった。それは、新八が陽真流抜刀術奥儀『空斬の太刀』を会得したら、不破家が代々継承する刀を彼に渡すよう兵庫から言付かっていることだ。この前の試合を見た限り、その時期が近いと思えて来た。尾張初代藩主徳川義直が下賜した品だから家宝に匹敵する。それを、兵庫は無造作に腰へ落としていた。そのため、刀が真に将軍家直系の者から頂いた物か、宗一郎は半分疑っていた。
　――確認しておくのも良いだろう。
　宗一郎は書棚の箱から蔵の鍵を取り出すと、濡れ縁から庭へ出た。母屋横の蔵には大切な書籍や価値のある物が保管してあり、兵庫から預かった刀もそこに眠っていた。宗一郎は、奥にある刀箪笥の引出しから目的のものを取り出した。下緒、柄と鞘に痛みは見受けられて使い込んでいるのは一目瞭然で、家宝と呼ぶには見劣りがする。
　宗一郎は刀の鯉口を切った。鎺（はばき）の部分が目に入る。明かり取りから漏れた光の下で、紛れもなく将軍徳川御三家に許された丸に三つ葉葵の刻印が浮かんだ。手を震わせながら、ゆっくりと刀身をさらして行く。波紋は数珠刃で長さは二尺二寸（およそ六十六センチ）程度だが、手入れは十分されている。
　――ま……紛れもなく技ものだ。間違いなく、徳川義直が流祖不破四郎へ下賜した一品。
　宗一郎は生唾を飲んだ。
　――父や兄も刀のことは知っているのか？
　いや、知っているからこそ不破一族を優遇しているのだ。将軍家に関わりある者を疎かにすることは、即ちそれを見下すのと同じで、幕府に知れたら僅か六万石の小藩など一ひねりで潰される。それとは別に、不破一族を傀儡に仕立てて政界を泳ぎ切ろうという深謀が、兄監物にはある。
　先日の試合で、不破新八の腕前は藩内に轟いた。それと彼の情報収集能力は、今から激変する世間を十分渡り切ることが出来る。大塩平八郎の乱や大老井伊直弼暗殺などと、血生臭い事件はこれからも起こりうる。そういった渦中に、兄監物は不破新八を密偵として投入しようとしているのだ。もし彼が捕らわれたとしても浪人の身で、藩は知らぬ存じぬの言い訳がたつ。
　――だが、新八は誰の命令を聞くか？
　兄監物や家老の香川ではない。宗一郎は沈思した。すると、今まで味わったことのない感覚が体内を駆け抜けた。まるで川底を見せない暗い淵から、闇に棲む魔物が地上を覗き見ている風景が目に浮かぶ。それは、紛れもなく心底に巣食う自分の邪心だった。

受賞の言葉

飛葉哲朗

ようやくここまで漕ぎ付けた、と云うのが実感です。受賞の連絡を受けた時、歓喜が背中から脳天へ向けて走ったことを思えば、小説を書くことに対してそれなりに入れ込んでいた自分を発見しました。なにぶん、最初に小説もどきを書いたのは高校生の頃で、当然、ひとりよがりの拙いものでしかありません。そして、人生面白おかしく過ごせればと考え、安易に生きて来た次第です。

二十代後半までは高度成長期で、働く場所に事欠かない時代でした。しかし、未曽有の景気悪化に大企業、金融機関が相次いで倒産して、その煽りを中小企業が受けて多くの人が職を失い、失業率は過去最大となりました。そのような世の中で生きて行くのは大変です。しかも、定年退職しても再就職も難しく年金だけでは暮らせない。

あとは一念発起しかありません。

長年、読書は続けていましたので、自然「再度小説を書こう」という気になりました。七転八倒しながら応募を繰り返し、今回、ようやく掲載の日の目を見ることになりました。でも、これで終わりではない……これから新たに始まると解釈して日々文筆修業に励みます。

作品中に登場する若者は柔術の技を研鑽し、高みを目指して人生を切り開く設定で、物語の中核にあたる人物です。しかし、あえて今回は脇役の庇護者へ視点を当てて等身大の人物を描いてみました。人生に対して、ややひねくれた自分の分身と云えるかもしれません。これを書いたことによって姉妹編へ新たな展開が生まれ、また、他の作品のこやしになれば幸いと思います。

飛葉哲朗

ひば　てつろう

1957年生まれ

80　福山大学卒業

印刷機械・OA機器の販売・運送業・建築関係の仕事を経て現在リフトオペレータの仕事に従事

広島市在住

文芸思潮臨時増刊号

エッセイ宇宙 7
詩銀河

THE ESSAY COSMOS
THE POEMS GALAXY

第８回「文芸思潮」エッセイ賞作品集

第８回「文芸思潮」現代詩賞・第３回イラスト賞作品集

第８回エッセイ賞・第８回現代詩賞の作品を集めた豊かなエッセイ・詩集

エッセイ宇宙・詩銀河
そしてイラストの世界が豊かに広がります

アジア文化社

1200円（税別）

ご注文はアジア文化社まで

TEL03-5706-7847　FAX03-5706-7848

歴史小説賞優秀賞

榎本武揚と手袋

吉田満春

榎本武揚

函館戦争で捕われた榎本武揚らは、今の丸の内のビルが立ち並ぶ辺りの牢に入れられていた。

『辰の口の糾問所』という。

江戸城の濠がその先にあり、広大な敷地に大名屋敷がつらなっている。大名の参勤交代がとりやめとなってから、武士が帰藩したため人の姿が絶えた。荒廃した屋敷姿は、表からでもわかる。

「えらい変わりようで……」

供に連れて来た番頭がおびえた声をだした。

「どこかの藩が門番で立ってますな、薩摩か、長州か」

番頭は首をまわしながらいう。新政府は大名屋敷を軍官舎に使っているらしい。

「黙って歩けないのか」

久米は叱った。本所の店から歩いてきて、くたびれたせいか苛立っていたようである。久米は榎本に会いにきた。榎本が捕えられて、一年半が経った、明治三年十一月の午前のことであった。

「ここらしいです」

（これが榎本さまがおられる糾問所か）

久米は、おのれのしようとしていることが、不遜なことではないかと思う。かといって、役目といえないこともない。案内には濃紺詰襟の七つボタンの服を着た兵がたった。御維新というものを具体的な姿で発見した思いであった。兵が戸を開けると、そこは板敷きの部屋で、小さな明かりとりの窓が壁のうえにあり、ひどく暗い部屋である。目が慣れると、人が座っている姿がみえた。久米は、突然のことに驚き、床に膝をついた。

「榎本さまでございましょうか」

相手は頷いたようにもみえるが、まだ距離がある。

「久しぶりだな」

「お懐かしくぞんじます」

「よせやい、こんな姿はみせたくはなかった。どうしてもというから、会ってやるんだ」

「おそれ入ります。すでにご案内のように、薩摩の黒田様、ご用人の申し出でございます。実は、榎本さまからご注文がありました手袋が、どういういきさつか、政府の役人の手に入りましたようで、手前どもの店にお尋ねに来ましたのが、二月前でした。それはそれは驚きました。この手袋はお前が拵えたもので間違いはないかとの仰せで、幕府に品を納めた私どもも、罰せられると思ったものでした」

久米は話しながら榎本の姿を観察した。牢着は麻の単衣の着物に、綿入れの半纏らしいものを羽織っている。顔色もよく、ひげも剃っているから、待遇はよさそうであると睨んだ。しかし、箱館に籠って、新政府と戦争した榎本は死罪になるのは明らかである。死罪になる前に、役人は榎本との面談を許したに相違ない。

「手袋は二つありました。一つはわたしどもが作ったもの。もう一つは皮の手袋でした」

久米は風呂敷を拡げ、榎本の前に置いた。

「確かに、この一つはオレが頼んだものだが、この皮手袋は……」

「なんでも、土方さまの手袋と役人がいっておりましたが」

「土方！　どうして土方と言ったのだ」

「土方さまが亡くなった場所で、兵隊が拾ったものだそうです」

「……」

土方歳三は新選組副長として働き、慶応四年（一八六八年）、局長・近藤勇が板橋刑場で斬首されると、宇都宮、会津に転戦し仙台に至り、奥羽越列藩同盟の総督に推薦されたが、同盟藩が次々と新政府に降伏すると、榎本のめざす蝦夷地に向けて、仙台折浜から出航した。

榎本は品川沖から、開陽・回天・蟠竜・千代田形・神速・

美賀保・咸臨・長鯨の八艦で脱出、仙台で収容した人員を合わせて三千人の反政府軍となった。

榎本が土方の視線を意識するようになったのはいつの頃からであろう。

十二月十五日、「蝦夷地平定」の祝賀会が各国領事を招いて行われた日、土方ひとり隅の席で沈黙していたという。乾杯に酔いしれている同僚をみて、

「浮かれている場合ではないのだ」

土方の漏れ聞く声であった。

その後「蝦夷共和国」が成立し、

総裁　榎本武揚
副総裁　松平太郎
陸軍奉行　大鳥圭介
陸軍奉行並箱館市中取締総裁判局頭取　土方歳三

らが選ばれた。

その夜、榎本は土方に皮の手袋を贈った。土方の側近から、従軍して来たフランス人、ジュール・ブリュネの皮手袋に興味をしめしていたと聞いていたからである。榎本は、文久二年（一八六二年）から慶応三年（一八六七年）の間、オランダで軍艦「開陽」（排水量二五九〇トン・最新鋭クルップ砲を含む二六門）ができあがるまで、国際法、軍事、造船・船舶に関する知識を学んだ。留学中にプロシアとオーストリアとの間で戦争がおこった。

戦争は、七週間でおわった。

プロシアは新式の兵器（後装式軍用ライフル）をつかい、従来の銃剣突撃で攻めるオーストリア軍をなぎ倒した。近代兵器こそが日本のめざすもので、新式の軍艦「開陽」に榎本の期待は膨らむ。観戦した戦場で、榎本は士官がはく白い手袋に興味が湧いた。手袋は戦場での指揮のみならず、接近戦の切り合いには防護としてきわめて有効であることもわかった。さらに、アメリカの南北戦争では、大量の手足切断兵が生まれ、手袋の有効性が知れるようになると、兵に手袋を支給すべきものと確信した。

ナポレオンの軍隊が装備したものに、天幕、乗馬用長靴、背のう（オランダ語の呼び名ランセルがランドセルとなる）、雨天用の帽子、水筒、腰ベルト、手袋がある。兵を最高の武器とするには、装備の充実はかかせない。特に革靴は必要不可欠だが、日本は無畜農業のため皮の量がすくなく、皮製品従事者にたいする偏見もあって、国産の供給は遅れた。日清戦争ではまにあわず、イタリアから古靴を輸入、改造してしのいだ。

関ヶ原の戦いまえまでは、手を保護するために、手甲（てっこう）や刺し子手袋、弓を射るときに用いる「ゆがけ」という鹿皮のものが手袋として使われていた。簡易な手甲をのぞき、いずれも高価なもので、兵に支給できるものではない。竹

刀稽古で使う小手（甲手）のようなものは、すでに戦国武将に使われていたのである。泰平の世が続いて、戦場での装束が薄れてきたのであろうか。

慶応三年（一八六七年）三月、おおよそ五年ぶりに日本に戻ってきた榎本は、まさかこの年に幕府がなくなるとは想像もしなかったであろう。五月、榎本は正式に「開陽」の艦長になり、オランダ留学仲間の林研海（はやしけんかい）の妹「たつ」を嫁にした。榎本三十二歳、「たつ」十六歳であった。

研海は、幕府御典医林洞海の長男として生まれ、榎本らとオランダ留学して医学を学んだ。帰国した明治元年十二月は、榎本らが品川を脱出した後で、明治政府に出仕した。後に陸軍軍医総監となり、軍医本部長に就任。明治十五年、ロシアに向かって出立、フランスで急病死した。

「海軍をまとめろよ」

軍事総裁の勝海舟に海軍副総裁に任じられた。勝にすれば、オランダに留学していた榎本は、政治的色は薄く、西郷と談判するには御しやすいと思ったのである。

榎本のもとには、新式の「開陽」、「回天」をはじめ、十二隻の艦隊がある。勝は、西郷との「江戸城明け渡し」の条件として、新政府に引き渡す交渉の最中であった。

「いいかえ、くれぐれも暴発はならねよ」

勝は榎本に釘を刺したが、江戸開城の夜（四月十一日）、品川沖から榎本は七艦を率いて脱走する。勝の面目はつぶれた。

「勝さん、約束がちがいごあんそ」

「西郷さん、海軍は戦をやるつもりですぜ」

勝は、捨て鉢ないい方をして西郷を牽制（けんせい）した。ここで勝を怒らせると、戦の収めどころがなくなるので、西郷は勝を館山に走らせた。

「脱走の罪は問わねえから、品川に戻れ」

と勝は榎本に約束した。

十七日、品川に戻った榎本艦隊は、勝が新政府に引き渡す軍艦交渉を見守っていた。もし、不利な結果がでれば、開戦も覚悟であった。榎本がいつから箱館行きを定めたか不明だが、勝の日記にある（閏四月二十三日）、榎本訪問と、箱館行きの相談を受けたのが、最初の表れであろう。

四月二十八日、艦船引き渡しは呆気ないほどの幕切れであった。新政府に引き渡したのは四艦で、富士艦を除いた三艦は戦力にならない艦であった。榎本は、品川沖で、上野山にたてこもる彰義隊の動きを注視している。睨みあいを続けている西郷にたいして、大久保利通らは、東征軍西郷から職務上の権限を取り上げ、新たな統率者、大村益次郎に命じた。東征軍参謀海江田は、兵力不足を理由に上野山攻撃に反対していたが、

「三千人あれば十分です、あなたは戦をしらない」

と押し切られた。

事実、五月十五日の総攻撃は、一日で終わった。彰義隊の残党狩りが一段落ついたころ、品川沖の榎本は、人を市中に走らせていた。

薩長の間者は、榎本艦隊の動静をうかがっているはずで、急な買い付けは相手を警戒させることになる。幸いにもフランス士官の協力を得て、横浜の貿易商からの注文とした。大店は避け、できれば裏長屋に近い店が好ましい。

「何を企んでいるんだえ」

榎本の目が険しくなった。

「企みなどはございません」

「……」

「まずは、順番にお話しすべきでした」

久米は、背をただすと目線を床に落として、

「榎本さまと初めてお会いいたしましたのが、上野の山で戦が終わってしばらく経ったころでした。榎本さまから外国の手袋をお示しなられ、これと同じものができるかとの仰せでございました。それまでは、繊維問屋としてメリヤス生地も扱っておりましたが、手覆いとしてまとまったご注文もございませんでしたので、受けるべきか悩みました。しかも、手の甲、掌にも綿を入れ、指はそのままの生地をとのことでした。しかも二千双（組み）、一月との仰せです。綿といい、数といい、これは蝦夷で役立てるものと推察致しました。江戸の町民は、旗本が腰砕けで、一戦もしない徳川さまの武士に憤慨しておりました。そこで榎本さまが戦ってくれるというから、心のなかで喜んだものでした。わたしらもお役に立てると。むろん、そんなあことは口に出せませんが、内職の者たちも感じていたでしょう」

久米は、頭を上げ、初めて榎本の正面を向いた。

「二千双（組み）といえば……」

久米の顔は、牢獄の榎本より白い。それは久米が屋内で作業するために、肌が焼けないためでもあるし、胃に病を抱える種類の人であるようにもみえる。四十歳の顔はつるりとした特徴のない顔である。

「大そうな数です。指の数にして一万本」

榎本は、自身が科学に詳しいから、自然、相手が口にした一万本に興味が湧いた。

（なるほど、二千双の指は一万本であるな）と、いわれて気付いた。

「家に帰って、手袋の大きさをお聞きするのを忘れておりました。足袋も大、中、小とありますから、大は一割、中は八割、小は一割と定めましたが、榎本さまの手袋を履くと指が長く指先に袋ができます。掌は大きく手首が開いてしまいます。これでは、手袋の用はなしません。おそらく外国の人の手袋ではないかと想像しましたが、この時はお

引け請けしましたことを後悔いたしました。品川沖にいる榎本様に再度お尋ねすることもならず、ともかく、手前どもの者を集め、十六から四十までの男の手形を集めるよう走らせました。怪しまれないように蘭学の先生に頼まれたといって、紙に手を押し付け、墨で縁取りしました。年の違いによる手の大きさを調べるためといって、百人の手形を取ったのです。驚いたことに、百人がすべて違うのです。足袋は、二つ爪、袋ですが、親指とその他の指が入るものですから、大きさに違いがあっても、なんとかごまかせるものです。ところが、指の長さ太さ、甲の大きさ長さも違うのです。そこで、指の長さ太さの違いがどこから来るのか調べました。中指から、親指の付け根までの長さと、手幅（小指から人差し指まで）により分けることが可能となりました。手幅が大きい人は、指が長いのです。そこで、大は一割、中は七割、小は一割とし、大より大きい大判を一割にいたしました。わずらわしいのは足袋作りに使う木型です。生地を裏にして縫いつけますから、木型は欠かせません。綿入れした掌を裏返しにして木型に入れ、同じく裏返した指を縫いつけるのですが、指を縫いつける際にできる耳が指にあたって気になります。さらに掌と指を縫いつけるだけでは弱く、補強する必要があります。そこで当て布を縫いつけ指の感触も良く丈夫な手袋となりました。一万本の指を作り、一万本の指を縫いつけるには、五十の木型が必要で、一日五百本縫いつけるとして二十日はかかろうというものです。木型すら、職人が五人で、一日十本ですから、五日はかかります。掌に綿を入れ、一本ずつ掌に縫いつけるのです。指の形をつくるのが難しく、慣れないために一万本作るのに、五十人が一月かかりました。掌に縫いつける作業も丹精を込めて縫いあげたつもりです。あの手袋には、長屋の連中も、内職のお武家さまにも助けられました。定められた納期に間に合わせるべく、六軒長屋の裏表を借りて常時三十人が徹夜で拵えたものです。お侍さんが刀槍で戦うとすれば、手前どもは針で戦ったのでございます。あの手袋は箱館でお役に立ったか気にしておりましたところ、お役人のお訊ねでございます。長州では、鉄砲を手で触ると錆びがでるとのことで、兵たちが工夫して引き金の指だけ穴状の手袋を使用したとのことです。今回注文の手袋は、綿入れで防寒にもなるし、榎本さまから、ご意見を聞いてくるよう仰せつかりました。この機会に、あの手袋がお役に立ったのかも知りたいのです」

榎本は……深い息を吐いた。

武士とて手覆い（手袋）の使用記述は、江戸時代になるととだえ、わずかに、赤穂浪士大石内蔵助が、討ち入りに使った手袋が泉岳寺に伝わるのみである。討ち入り時の気候は冬の深夜（今の暦で一月三十日の未明午前四時ごろ）。冷え込みがいちだんときびしい。装束は火事装束であった

という。頭巾に兜、小袖の下は鎖帷子を着込んだ完全武装であった。手首には鎖を仕込んだ手甲、あるいは篭手を使った者もいる。

赤穂浪士四十七人に一人の死者がでず、吉良側は十四名の武士、足軽二名が死亡、負傷者二十三名という差は、装束の違いによるものであった。

乱戦になれば、つばぜり合いという言葉があるように、離れた隙に切っ先が指に触れるだけで刀は握れなくなるか、握力が弱まる。とりわけ親指が骨までたっする傷を負えば、戦闘力はうしなわれる。

赤穂浪士の討ち入りはその後、歌舞伎、浄瑠璃など演劇などの脚色、伝承により、山形模様のそろい羽織、山鹿流陣太鼓といった討ち入り演出が永らく大衆に受け入れられてきた。赤穂浪士討ち入りは、華美な物語が創作され、討ち入りに手袋という野暮な史実は消されたものであろう。

その後、鳥羽伏見の戦いは冬季であるにもかかわらず、幕府、薩長側も素手で戦争を描いている。冬季に戦闘を行う場合、手が凍傷するばかりか、激しい刃合わせにより柄を持ち続けることは不可能と想われるが、その後も日本映画界は素手での戦いに固執しているようである。

日本の手袋文化は鎌倉時代に武士が着用した篭手が始まりとされる。江戸時代に入って、オランダから伸縮性生地のメリヤスの手袋が入ってきたが、高価なものであり浸透はしなかったが、長州の鉄砲隊で手袋が広まり、下級武士が内職で手袋を縫った。徳川幕府の軍隊は（一八六七年）、四十八大隊、二千四百人の傭兵をもってつくられ、手袋の需要がひろまったため、手袋は武士の内職として欠かせないものとなった。

云い伝えられる話では、柄を覆う袋、手袋、靴下は町人が作らず、武士が内職としてつくっていたとある。なかでも、「南部松前藩」、「一ツ橋」、「田安家」、「常陸龍ヶ埼藩」の家中は「よくこれを編み、一工業となりしなり」としるされている。編んだものは江戸市中の糸屋、足袋屋にて売られていたという。

軍隊では防寒用として皮の手袋が求められたが、皮そのものがすくなく、皮のなめし技術も外国に劣っていた。皮資源の乏しい日本では、軍手といえばメリヤス製の手袋を改良して、今日では、作業では欠かせない「世界の軍手」となって広まったのである。

「土方さまが亡くなられた一本木関門にて手袋を長州の兵が見つけ、いつしか新選組副長、土方歳三の手袋ではないかといわれはじめました。そこで榎本さまにご確認していただく他、手袋の役目についてお聞きし、どのように改良すればよいかお尋ねしたいのでございます」

「薩長はそんなに興味を示したのか」

榎本の好奇心は強くなる。オランダで化学の他、新しい

工夫にも興味がつきない男である。

「新政府は、常備軍を新設するようでございます。そうなれば、てまえどもには願ってもないことで、軍にお納めできれば、失業しているお侍さまのお役にも立つばかりか、しいては、軍に貢献できるのです。どのように改良すればよいか、お聞きしたいのです」

「金になるのかえ」

榎本の口が歪んだ。

「悪くとるな……おまえさんの役に立つことなら、話してやろう。おまえさんが拵えた手袋がそんなに大変なものだと思いもよらなかった。手袋は確かに役立った。しかし、役立つものを発揮させない罪はおれにある。俺に従った兵を満足に動かすこともできなかった罪がな……」

榎本は久米をみすえて、

「開陽が座礁したことは知っているな」

久米はうなずいた。

「冬の海は目まぐるしい。凪いだと思ったらたちまち変貌し荒れ狂う。そちの手袋はその開陽と共に沈んだのだ」

「あ！　それでは使われなかったのでしょうか」

久米は悲壮な顔になった。

「開陽はおれがオランダから連れて来た艦だ。江差沖で沈んだ時は、我が子を失ったごとくであった。すまなかった」

久米の目の前の男が、急に小さくみえた。

「二百ほどは、艦長室においていて、大鳥（圭助）の部隊に分け与えられたが」

「それが、この一つですか」

「そうであろう」

「お役に立ったのでしょうか」

「役に立つどころではない。この手袋がもしあれば、凍傷は防げたであろうし、作戦も活発に展開できただろうよ。冬季には必ず必要なものだ、おまえさんがしたことは、日本の軍に役立てられる。だから、兵には替えの手袋を支給すべきだ」

「この皮手袋は土方さまのものでしょうか」

「さあ、俺が土方に贈ったものとは違うな。箱館のアイヌに牛革で作らせたものだが、この皮は鹿か馬の皮を継ぎはぎに作っているようだ。土方さんが新たに拵えたともいえるし、他の者ともいえる」

「防寒には革がよろしいのでしょうか」

「革がいい。防水にもよろしいが、兵に支給できるか疑問だ。ともかくメリヤスの手袋を軍は早急に揃える必要がある。こういえば、おまえさんも助かるかえ」

「ありがとうございます。榎本さまのお墨付きをいただいたのですから、励みになろうというものです。政府は教練に力をいれるそうで、手前どもの手袋がますます必要になります」

「その通りだ。軍に納めるから……軍手というのはどうだぇ！」
榎本は楽しそうな顔をした。
「なるほど！　軍手でございますか……」
久米は榎本の才覚に驚いた。榎本は五外国語（オランダ、ドイツ、フランス、ロシア、英語）を話せたと言う。軍事の才能ではなく、テクノクラート（技術官僚）としての萌芽ができていたのであろう。榎本は後に許され活躍するとともに、彼の日常に手袋が常に存在（北海道、ロシアと赴任先で使われていた）し、彼自身が手袋であるという境地に至るのだが、まだ先のことである。
「これです」
久米が膝の上に置いた風呂敷を開くと、綿入れの靴下がでてきた。
「手にとってもよいか」
好奇心が押さえられない榎本は目を輝かせている。一足を手にすると、木綿地の裏に綿が敷き詰められ、暖かな感触が伝わってくる。
「牢内は寒いと思いまして、十足お持ちいたしました。すでにお許しをいただいております」
「……すまないが、……拙宅の母にひとつ分けてもらえないだろうか」
「かしこまりました」
「うちの者は、裁縫も得意でな……」
久米は榎本が言わんとしていることが理解できた。糾問所を後にすると、榎本の家を訪ねようと決めていた。
（生活に困っているとは聞いていたが、榎本さまは、家族の暮らし向きを心配しているのだ）
榎本と妻たつが共に暮らしたのは、わずか五日で、軍艦奉行となってからは、函館に向かうまで一年にも満たない新婚生活であった。罪人となった家族はたちまち暮らしに窮したことであろう。
牢に戻った榎本は、久米の手土産である綿入れの靴下を牢名主に渡した。牢名主の采配で配られるのである。榎本たちが、最初に牢に入れられた日、榎本は牢名主から、お決まりの罪状のお訊ね儀式が行われた。当時は、雑多な罪人が、下は少年から老人までこの牢に押し込まれていた。チンケな罪は、牢名主によって命を取られることもある。
「おめえの罪状は何だえ！」
「箱館の罪人でございます」
あ！　と皆が驚いたのは、噂で聞く榎本たち幕府脱走の侍たちと分かったからである。牢名主は、名主を榎本に譲ろうとしたが、断って、牢名主待遇となった。かれらの罪は生活に困ってのものが多く、同情すべき罪人が多かった。
幸い、黒田清隆の計らいで、牢内における読書も差し入れも許されていた。彼ら罪人は、無学のため犯罪を繰り返

すのだから、まず読み書きを教え、彼らが生計できるように技術の手ほどきをしたり相談に乗ったりした。零落した旧幕臣や榎本家の生活に役立てようと、油、石鹸、ろうそく等の製法を書き留め、兄に手紙をかいている。後に、榎本は親族に石鹸工場を経営させ、日本で初めて透明な石鹸を売り出したのである。
榎本は久米の『お役に立ちましたか』という言葉が耳朶に残っている。土方の目も気になる。土方は、どこかで覗き見ているような気がしている。それは、
（俺の負い目というやつだろう）
といって、これという確かなものはないが、開陽が沈んでから、土方は、榎本たちとはどこか一線を引いたようにも思える。
榎本は、蝦夷開拓という希望をもち、政府に嘆願し続けていたが、土方は、戦をするために蝦夷に来たという、ぶれない気迫があった。
対して、榎本には、戦が一番ではない。蝦夷地を開拓する目的のための手段でしかない。箱館で降伏した後の噂は、土方が邪魔であったから、榎本に殺されたというものであった。土方とともに降伏すれば、薩長にとっては、土方は許さざる者であり、榎本たちのみ除外されることはない。
また、土方の遺体が見つからないことも、榎本たちに疑惑の目が注がれる。土方の傷は背中にあったという説で、味方から撃たれたものだという。それを隠すために遺体は消されたのだという。降伏を勧めた黒田（了介・清隆）が、榎本たちを助命するために始末したという見方も、榎本らとの共謀という説も成り立つのである。
その土方が彰義隊、陸軍隊、守衛新選組を率いて七百の兵とともに松前に向かったのが十月二十八日とされている。榎本が「開陽」で箱館に入ったのが十一月一日、あるいは、五稜郭陥落の日の二十六日に「回天」にて上陸したという。十一月一日であれば榎本は土方に会えないし、二十六日では、榎本が会議で、土方に松前攻略を頼んだことになっている。榎本は伊能忠敬の弟子となった父武規の影響で、十九歳で函館奉行の小姓として、蝦夷地、樺太探検に参加したとの言い伝えがあるように、北の気候の知識は他の者より多くあったにちがいない。
榎本脱走軍が、鷲ノ木海岸に現れたのが十月二十日である。今の暦では十二月四日にあたる。海から見た陸地は「連山波濤のごとく、積雪銀を敷くが如し」という凍てつく景色であった。
十月二十一日　風浪のなか上陸。榎本らも上陸。軍議する。大鳥圭助は本道口、土方は間道口と定める。

二十二日　土方らは宿野部、尾白内を過ぎ砂原に着陣。
二十三日　天色濛々寒風肌を裂くが如し。北風ますます激しく、雨雪混降して将より卒にいたるまで一重の戎服（洋式軍服）をまとうのみ。足に袋なく頭に笠なく満身濡れざるところなり。四肢亀手（きしゅ・亀のようにひび割れた状態）してほとんど凍餒（凍え飢えた）せんとす。広部宿陣。
二十四日　寒風颯々（風のふくさま）として皮膚に徹す。露営。
二十五日　湯の川に宿陣
二十六日　黄昏に五稜郭に入る。
二十八日　土方ら七百人松前攻略軍、五稜郭出発。

この日程は土方と供にした「額兵隊」星恂太郎の日記である。

雪上を進む一重服の土方軍をどのような思いで榎本は見送ったのであろう。兵のなかには、着物に袴姿の者も多数あったはずで、足袋にわらじばきの彼らが、吹雪のなかで立ち往生して目的地にたどり着く前に、壊滅しても不思議ではない。

仙台で新選組に入隊した十七歳の小笠原藩の胖之助は七重の戦闘で「重い防寒具を脱ぎ棄て」敵陣に切り込み、戦死している。「重い防寒具」が何を意味するか不明だが、ワラで編んだ蓑であろうか。一方の大鳥軍のほうでも、「雨に降られたこともあって、着衣が凍って板のようになり、畳むと折れてしまうほど」だったという。

土方ら八百人、大鳥ら七百人が五稜郭に辿り着いたとき、凍傷で傷ついた兵は半分を超えていたであろう。兵の服装は、手袋なく、笠もなく、防寒服もない。足は足袋にわらじであったから、裸同然であった。しかも、雪は三十センチの深さで、寒風すさぶなかでの行軍である。

雪中の厳しさを知っている榎本は何故、鷲ノ木に上陸したのか。外国船との不慮の事故を避けたとの説もあるが、冬の装備がない榎本軍は、箱館に着く前に遭難してもおかしくはない。むしろ、箱館に艦を入れ、大砲の威力を見せ付けながら上陸すべきである。冬の北海道に上陸した榎本が目にしたのは、凍てついた荒野であった。科学的素養のある榎本が、危険な雪中作戦を提起できるはずもない。陸上の作戦は、土方らの陸戦隊が主導したと見るのが自然で、冬季の戦闘を知らない土方らは、政府軍を掃討しながら五稜郭を目指す、正攻法を主張したのである。冬支度のない軍を、補給もない見知らぬ地から進軍させる危険を、土方は、

「雪が何だ、ただ進軍あるのみ」と、五稜郭の地図を叩いた。

大鳥圭介も賛同し、榎本軍は日本史上初の敵前上陸と雪中行軍に決したのである。

日露開戦前の明治三十二年に起きた「八甲田山遭難」は、ロシアとの開戦に備えて、寒冷地における戦闘を予行したものである。遭難の日、日本各地で観測史上最低気温を更新した日で、最低気温マイナス二十度以下とされている。遭難時における装備は将校が「毛糸の外套一着」・「毛糸の軍帽」・「ネル生地の冬軍装」・「軍手一足」・「長靴型軍靴」、下士卒が「毛糸の外套二着重ね着」・「フェルト地の軍帽」・「小倉生地の普通軍服」・「軍手一足」・「短脚型軍靴」であった。

土方軍の装備と比べて、幾分良いとしても、防寒服になってない以上、冬季に耐えられる装備ではない。助かった兵の証言によれば、

「予備の手袋、靴下を用意しておらず、装備が濡れてしまったら替えはなく、そこから凍傷が始まり、体温と体力を奪われ凍死していったという」

さらに、

「予備の軍手、靴下の一組でも余計にあれば自分は足や指を失わなかっただろうし、半分の兵士が助かっただろう」

と、生存者の小原伍長は証言を残している。

榎本が五稜郭の到着した兵の凍傷状態を知れば、榎本は「装備」の点検、少なくとも手袋の支給、足には袋を被せ、頭には笠を被せるよう進言したと思われる。従軍したフランス士官も、榎本軍の貧弱な冬装備に危惧の声をあげたであろう。

しかし、土方は、消耗の少ない部隊を選び、一日おいた翌日に出発するのである。しかも、「四斤山砲」と思われる砲を引いていった。「山砲」は重さ二百十八キロ、砲弾の重さ四キロである。冬季時に素手で鉄は触れられないから、なんらかの方法で運搬したと思われるが、雪のため人力に頼るしかない。砲弾一発を二人で担いだとして、五十発に百人を要する。大砲は分解して運んだが、とてつもない労力である。

土方らは途中の部落で、藁のくつ、藁や刺し子の二股手袋、靴下、蓑を強制的に徴収した。ワラがとれない蝦夷では内地からの輸入品なので、獲られた家では難渋したにちがいない。それにしても七百人分を揃えられたとは考えにくい。

土方自身、どのような装束で五稜郭から出たのか定かではないが、土方は並はずれた強靭な身体の持ち主である。土方は宇都宮城の戦いで、足指に銃創を負ったとされている。蝦夷に上陸して、五稜郭に一日滞在しただけの出陣である。しかも、再び五稜郭に戻って来るのは、榎本たちが「蝦夷地平定祝賀会」を開いた十二月十五日（一月二十七日）である。およそ五十日を雪の中で転戦していたことになる。冬装備のない土方軍は、どのように雪と寒さのなか

戦っていたのか定かではない。

「沢さん、おれらは、何にも言えないまま死ぬんだろうか」

「こりゃ珍しい、釜（釜次郎）さんらしくもない」

同じ牢の沢太郎左衛門が、いつもの穏やかな目で言った。二つ上の沢は榎本と同じオランダ組で、オランダでは黒色火薬製造法の取得と火薬製造機械の購入が目的であった。沢は当時秘密に属する火薬廠に人足として入り込み、職工頭と仲好くなり、製造法を習い、工場技士を味方にして、火薬製造機械の発注に成功したという、にわかに信じがたい武勲をもつ。榎本共に品川を脱出した折の「開陽」艦長で、函館では開拓奉行として、室蘭に赴任する。

「手袋を作った久米が来たのさ」

「久米？……」

「開陽に積んでいた手袋さ」

「あの手袋でしたか」

思い出すのも辛い「開陽」の沈没であった。土方の応援と物資の陸揚げもかねて十一月十四日江差沖に到着、艦砲射撃を行うが、反撃なく、松前兵は江差を捨てたものであった。榎本らは江差に上陸、江差奉行所で作戦打ち合わせしていたが、夜、暴風が突然襲い、開陽は陸に吹き寄せられ座礁した。救援に向かった「回天」、「神速」であったが、「神速」は沈没、「開陽」は、土方、榎本の前で、数日後には沈没した。

「釜さんは、船に積んだメリヤスからマント、わらじを覆う布袋、足袋、脚に巻きつける布を刺し子にするよう箱館の住民に作らせましたな」

「なにも開陽で行く必要はなかったと言われるが、回天も神速も活動しているし、出来上がったマントや靴袋を渡したかったのだが」

榎本の目から涙がでた。

「惜しいことをしました」

（開陽の引き揚げ作業が昭和五十年から行われた。遺物は三万点を超えるもので、大砲、弾丸、サーベル、日本刀、帆布のほか、機関銃にあたるガトリック砲や、布九百五十二点、皮五百七十四点の他「ケレートマーケル亀吉」という名札の裏に開陽と焼印されたものが発見された。ケレートマーケルとは古いオランダ言葉で「仕立屋」という意味である。榎本は士官用の服を仕立てるつもりであったのかもしれない）

榎本ら幹部は、五つに分けられ収監されていた。

一番牢　荒井郁之助（海軍奉行・開拓使・初代中央気象台長・明治四十二年没七十四歳）

松岡磐吉（海軍頭・蟠龍艦長・獄中死）

二番牢　松平太郎（副総裁・開拓使・商売人なるも失敗、

榎本の援助で生活したとされる・明治四十二年七十一歳）

三番牢　大鳥圭介（陸軍奉行・開拓使・駐清国特命全権公使・明治四十四年没七十八歳）

四番牢　永井尚志（函館奉行・開拓使・元老院権大書記官・明治二十四年没七十六歳）

五番牢　榎本武揚、沢太郎（開拓奉行・開拓使・海軍教官・明治三十一年没六十五歳）

大鳥は土方を評して、「待つことを知らない男」であると。常に判断がすすむか引くしかない。じっとして大局を窺うことがない。むしろ大鳥のような思考の持ち主が戦下手で、事実そうであった。果断な一撃で粉砕する攻撃こそ最大の防御であり、その戦闘精神こそ勝敗を決定づける。

「確かに土方さんは戦争がうまい」

榎本は認める。

「土方さんは資金や物資、外交、住民に対する宣撫となると、考えなくてもよい立場ですから」

沢にしては冷たい言い方である。

「室蘭では、開拓を実行し、住民も安心していました。土方さんが通った村は、宣撫どころか、食糧も物資も取り上げたというじゃないですか。恨みはあれ、ヤンシューで土方さんの評判はよろしくないですよ」

「それも金のなくなったわたしの責任です」

榎本軍は資金を作るために、課税や独自の貨幣を鋳造したが、市民にすれば榎本軍の負けが見えていたであろう・「上陸した政府軍を先導したのも土方さんが攻略した村から出たそうですね」

沢は厳しい。

「誰でも勝つ方になびくものですよ、土方さんのせいでもないですよ」

「釜さんは人がいい」

沢は笑って、

「あんたが総裁でよかった」

「それはどういう意味ですか」

「御自分でお考えなさい」

沢は、榎本から去っていった。榎本が総裁に選ばれたのは偶然ではない。土方が選ばれれば、蝦夷共和国は政府に対立する武闘集団になるが、勝とつながりのある榎本は汚れていない首領である。蝦夷独立を認めない新政府へのメッセージとして榎本の非軍事的履歴が相応しいことを投票する皆が認めていたであろう。ただ一人を除いては。

沢に言われるまでもなく、市民を巻き添えにしてまで戦争を続けるつもりはない。榎本が降伏を決断したのは無意味な死を増やす戦いをやめるためである。土方は戦争そのものに意味をもたせない。勝敗は次のものであり、潔い

「死」こそ「最後の侍」として望むところであろう。その土方のひたむきな目に、榎本はやはり「引け目」を感じるのである。

黒田の榎本に対する助命はついに西郷の支持を得る。木戸孝允らの、「新政府に最後まで抗戦した最悪の賊人を死罪にしなければ、法の公平が保てない」と斬罪の主張を覆しての政治的決着である。

出所後の榎本は、黒田の手にあって、その才能を遺憾なく発揮する。その使役すること甚だしく、北海道に赴任したのは出所後四月目である。全道を駆け廻り、鉱山調査、産業、気象調査と膨大な作業をこなし、黒田がアメリカから連れて来たケプロンとの対立をかわし黒田を救う。

樺太千島領有問題で暗礁に乗り上げると、黒田は榎本を推薦しロシアに走らせた。今日の「北方問題」の歴史的根拠は、このときに榎本とロシアが交わした「千島樺太交換条約」にある。榎本は、この交換条約のために明治七年一月から四年もロシアに滞在したのである。

その後、外務大輔、駐清国特命全権公使をはじめ、数々の大臣を歴任した。黒田清隆内閣に入り、大日本憲法発布式には、榎本はその先導を申しつけられている。

黒田あるところ榎本ありで、榎本の手柄は黒田のごとくであった。世間は、「黒田から救われた命」と見るし、「命を拾った榎本」と見る。

次から次と、「売れっ子芸者」よろしく呼ばれれば見事な舞いを披露する。

逓信大臣を務めたおり、官僚が電信について説明にきた。

「おいおい、モールス電信機を持ち込んだのはおれが最初だよ」

といったという。箱館戦争でも、榎本は連絡に電信を使っている。

また、郵便の〒マークは最初Tであったが、万国共通の「料金未納の記号T」と紛らわしいことが判明、榎本は、「では頭に一を引くことではどうか」

と提案、卓抜なアイデアに皆が驚いたという。

明治五年三月八日　開拓使四等　北海道鉱山検査を命じられる。

明治六年一月十七日　開拓使中半官就任　ケプロンと会談開始。

明治七年一月十四日　初代海軍中将　駐露特命全権公使を命じられる。

明治十二年二月十二日　条約改正取調御用掛命じられる。九月十日　外務省二等を兼任。十一月六日　外務大輔兼任。

明治十三年二月二十八日　海軍卿兼任。

明治十四年四月七日　海軍卿兼任免除。

明治十五年二月八日　北海道開拓使廃止される。

明治十五年八月十二日　駐清特命全権公使。明治十八年十月十一日、駐清公使免除。十二月二十二日　逓信大臣に就任。

明治二十一年四月三十日　農商務大臣兼務。

明治二十二年三月二十二日　逓信大臣免除され文部大臣に就任。大日本帝国憲法発布。

明治二十三年五月十七日　文部大臣罷免される。　枢密顧問官に就任。

明治二十四年五月二十九日外務大臣就任。五月十一日、ロシア皇太子負傷。

明治二十五年八月八日　外務大臣辞任。

明治二十六年二月　植民協会会長となる。八月二日、妻たつ死去　四十二歳。

明治二十七年一月二十二日　農商務大臣に就任。八月一日、日清戦争はじまる。

明治三十年三月二十九日　足尾鉱毒事件の責を負い、農商務大臣辞任、政界から引退。

これらの地位は、みずから猟官して得たものではない。黒田から推薦され、仕事に応じた肩書が後から付いてくるのである。ロシアとの「千島樺太交換」交渉において、「初代海軍中将」の肩書は外交上のものではあったが、ロシア皇帝アレクサンドル二世は、箱館戦争の降将が来たことにいたく興味を示し、何かと処遇してくれたという。榎本の、たぐいまれな語学力と豊富な知識、江戸っ子にある粋な感性は、社交界で好感をもって迎えられたのである。それ故、明治二十四年に起きた、日本訪問中のロシア皇太子ニコライを傷つけた事件は、日本政府を震撼させ、全国国民が慌てふためき、なすこと知らずの状態とさせた。黒田は、そのときやく薬籠から薬をとりだすように、

「榎本を」

とロシアの謝罪使節に加えるよう推薦した。榎本は辞退しつづけ、ついには、明治帝が使節随行を懇願する事態となった。黒田は飼い犬が吠えたことにあわてて、

「この大事を納めるのは貴殿あるのみ。不忠なる榎本を許されたお上の宸襟を安んじ奉るは臣の道ではないか」

榎本は断ることができなかった。

この使節団はのちにロシアの了解を得て中止となったが、このためか、榎本はさっそく外務大臣に就任する。再び、ロシアから申し立てられた場合の処置に違いない。

「自家薬籠中の物」として、榎本ほど便利なものはない。黒田はおおいに榎本を利用したが、榎本も黒田を後ろ盾として、使えるとなれば釈放された仲間も採用した。

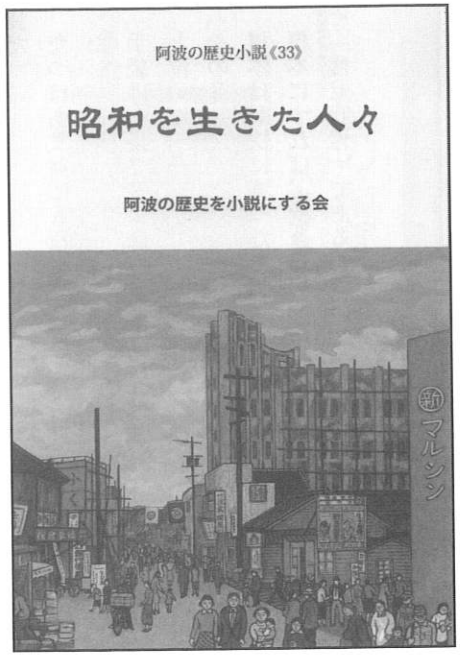
北海道の炭鉱、鉄道の管理と開発を山内提雲に任せる。山内は慶応三年にパリ万博に通訳として徳川昭武に随行した幕臣で、弟の徳三郎は、榎本が鉱石を分析し、ライマン

の助手として、北海道をつぶさに調査する。開拓の後半は、
「炭鉱、鉄道は榎本の一族によって達成された」
といわれるまでになった。
提雲は、その後鹿児島知事、八幡製鉄所所長となり日本の近代化に果たした。徳三郎は開拓使が廃止されたのちも調査を続け、明治二十年、北海道最大の石炭層を発見する。三井砂川炭鉱として昭和六十二年まで採掘が続くのである。

黒田と榎本の関係は生涯変わらない「契り」をもち続けている。黒田を支持し愛した西郷、大久保が相次いで死去すると、黒田は薩長閥の複雑な争いに抗しきれず、酒と酒にまつわる醜聞が彼を閑職に追いやることになったが、黒田が亡くなる前（明治三十三年）に、
「貴君から受けた恩義を子々孫々に伝えたいと考えるから」（田健次郎　黒田清隆伯）。
と榎本は息子武憲（たけのり）（二十七歳）と黒田の娘梅子（十八歳）を結び、ついに血のつながりをもつのである。
明治三十三年八月二十五日、黒田は五十九歳の人生を閉じた。薩摩派閥から嫌われていた黒田のために、榎本は葬儀委員長を務めた。後世の批評家は黒田を評して、「ただひたすらに西郷と大久保の意に添わんとすることに終始した人」ときわめて辛い。黒田の評価は、榎本という砂金を発見した人として記憶されるであろう。
あるいは、「もったいない」という日本人の精神を実行した人といえるかもしれない。宝の山である箱館戦争の罪人を斬死させることは太陽が西に沈むほど疑いのないことであったのを、
「もったいない！　もったいない」
と要人を口説く黒田は、アイドルを発掘するやり手のプロダクション経営者のようでもある。黒田の酒狂いは、官僚に抗した、孤独な戦い故であったかもしれない。
榎本は、黒田が亡くなった八年後の明治四十一年に没する。
日本は三年前にかろうじてロシアとのポーツマス条約を得て、南樺太を得た。その島は日露の兵たちが流した血の代償である。
榎本は、明治七年六月十日、ロシアのペテルブルグにおいて「千島樺太交換交渉」に入る。そして四年後の明治十一年、日本人初の陸路でのシベリア横断を決行するのである。ロシアの産業、民族、軍の状態をつぶさに観察するためである。そののち明治二十五年、陸軍少佐福島安正は、ロシアとの開戦に備えて、一年と四ヵ月をかけた単独横断をおこなった。この冒険は、「シベリア単騎横断」と呼ばれ国民に広く知られたが、昭和十年に、榎本家の執事が、榎本家の跡始末を行っているおり見つけた「日記」が、分

家の榎本春之助によって、「西比利亜（シベリア）日記」としてわずかな量が、世間をはばかるように刷られた。
日記は明治十一年七月二十六日のペテルブルグの汽車から始まり、その後は馬車、船でウラジオストックに達し、最後の十月二日の小樽着で終わっているものである。日数にして六十六日である。
大国ロシアとの「千島樺太交換条約」を成し遂げた偉業を、歓呼で迎えられることもない榎本は、目立たず、任せられた仕事を淡々とこなすのみである。自分の労苦さえ口にしなかった人生であった。
明治十一年十月二日　最後の日記の記述。
「ウラジオストック出帆四日夜、北海道小樽港着。それより札幌にいたり、逗留し、ふたたび小樽に引き返し、銭函にも行き、小樽より汽船にて函館（明治元年に「箱館」は「函館」に改名された）に出て、十月十九日に函館を出帆。同二十一日夜、海路横浜に着港、同夜ただちに東京にかえりたるものなり」と。

明治二十五年、福沢諭吉が榎本と、勝に向けて、
「武士には忠臣は二君に仕えずという武士道がある。あなたは二君に仕えただけでなく、新しい主人の下で再び高官の職についている。はずかしくないのか？　痩せ我慢する気はないのか」（痩せ我慢説）と公開質問した。勝は、
「おこないはおれのもの、評価は他人のもの、おれのしったことじゃねえ」と。
それに対して榎本は何も答えなかった。
ある日、榎本には珍しく、たつに心情を語った。榎本は世間を憚って笑顔を見せないが、もとは江戸っ子で、さっぱりとした優しい男である。留守がちのくせに子供は男三人、女三人（二人は夭折）に恵まれた。
「黒田さんはよくこぼしていた。妻は病で臥せっているため（肺病）、家の中は北海道の寒風のなかにいるようなものだと。あれほどの高官になられても、家のなかがまとまっていなければ、どれほど冷たいものか。山形さん（元老



院・有朋）も家庭には恵まれない人である。それに比べれば、ただただ、ありがたいと謝するほかはない（実子七人のうち六人が早世した。このため、山形の性格に冷徹な暗さを落とす一因と見なす向きもある）」

たつはからかってみたい思いで、

「わたしは例えるなら何でしょうか」

「灯台の灯りだ」

榎本の口から明快にでた。

（まあ、ぬけぬけと）

たつが思ったのは、榎本は女性にもてた。箱館のころの写真が出回って、榎本もまんざらではなかったらしいことを聞いていたのだ。

「灯りがなければ船は遭難する。ありがたいものだ」

事実、榎本は獄中からも、赴任先の北海道、ロシア・サンクトペテルブルグからも、こまめに妻に手紙を書き送っている。

たつは、愉快になって、旦那さまは例えると何でしょうかと尋ねた。

「おれは手袋だ」といった。

「手袋ですか？」

たつは榎本の例えがおもしろく笑った。

「そうだ、履くときは新鮮で好まれ、相手の手にあわせる。ボロボロになるまで使われ、いらなくなると捨てられる手袋だ」

たつはあまりにも榎本の境遇を言い当てた言葉に腹がたった。

「手袋は手袋でも、日の本にひとつではありませんか」

と泣いた。

「その通りだ、その通り」

榎本は豪快に笑ったという。

榎本にすれば、就きたくもない政府の仕事をすることこそ「痩せ我慢」であると言いたかったであろう。

＊函館の表記について。明治元年まで「箱館」とし、明治政府によって改名されたその後を「函館」とした。

＊船の「丸」表記は不統一のため省いた。

受賞の言葉

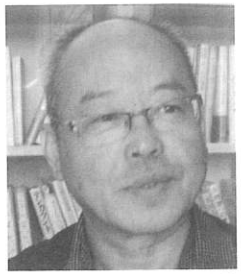
吉田満春

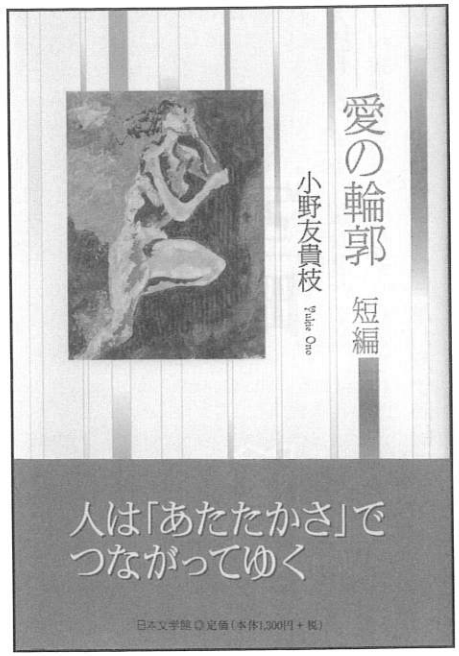
千葉の九十九里に来て四年になった。住んだ年の九月にリーマンショック、昨年は津波と、厳しいものであった。幕末に掛川藩から強制的にこの地（千葉県山武郡）に移封を強いられた松尾藩士たちの思いを「幻の松尾城」で著した。郷土史を調べるにつれ当時の日本人が、同じ人種とは思えないほど「苦労」の連続であることが分かる。

今回の主役である榎本は、降将である故に歴史から歪曲された人物である。その榎本を見出した黒田も首相を務めたわりには不当な扱いである。歴史は「勝者が作る」ものとすれば、その後の日本が軍閥として勃興するのに、榎本らの業績は目ざわりであったに違いない。

この地で地域の情報雑誌、役所の広報等に拙文を掲載することになった。すると俄かに己の力量に不安となった。昨年、初めての公募が佳作となり、今回、五十嵐先生からの電話を受け、安堵の方が強い。

言葉の力は大きいと信じたいが、反応がないと心配になる。この賞は「ふぐ調理師免許」のようなもので、無害なものも、毒も出せる腕を認められたと信じたい。諸先生らに感謝を表したい。





吉田満春

——よしだ　みつはる

北海道室蘭市出身（第19回芥川賞受賞作家・八木義徳がいる）昭和27年生まれ、60歳

明治学院卒。シドニーに遊学後勤める。

平成元年　会社経営

千葉山武市に移転

地域雑誌「燦（さん）夢の詩」編集長

山武市教育委員会編集委員

山武市役所広報編集委員

ＮＰＯ九十九里広域活性化事務局員